

津軽弘前藩の武芸(11)

資料紹介

太田尚充

寺山家所蔵・武芸関係古文書等(6)

目次

まえがき

内容紹介

四、林崎新夢想流居合(承前)

20、居合向之次第 一

卷子本

先の部分を欠く。内容は「向之次第」

浅利伊兵衛均禄より八反田宇右衛門あて。日付、朱印・花押はない。

21、居合右身之次第 二

卷子本

先の部分を欠く。内容は「右身之次第」 以下20と同じ。

22、居合左身之次第 三

卷子本

内題「左身之次第」 以下20と同じ。

23、居合外物之次第 四

卷子本

内題「外物之次第 四」 以下20と同じ。

- 24、居合外物之次第 五 卷子本
先の部分を欠く。内容は23と異なる「外物之次第 五」である。以下20と同じ。
- 25、居合秘歌之巻 六 卷子本
内題「秘歌之大事」 以下20と同じ。
- 26、居合極位相傳之巻 卷子本
伝系他20と同じ。
- 27、居合極位相傳之巻 卷子本
浅利伊兵衛均禄より樋口萬之助あて。日付、朱印・花押はない。
- 28、居合向之次第 一 卷子本
内題「向次第」
- 29、居合右身之次第 二 卷子本
浅利万之助均費より西館縫之助あて。日付、朱印・花押はない。
- 30、居合左身之次第 三 卷子本
内題「右身次第」 以下28と同じ。
- 31、居合外物之次第 四 卷子本
内題「左身次第」 以下28と同じ。
- 32、居合外物之次第 五 卷子本
内題「外物次第」 以下28と同じ。
- 33、居合極位相傳之巻 卷子本
伝系他28と同じ。
- 34、居合左身之次第 三 卷子本
先の部分を欠く。内容は「左身次第」
- 35、居合外物之次第 五 卷子本
浅利万之助均費より佐和市之亟あて。日付、朱印・花押はない。
- 寛保二年（一七四二）十二月吉日、藤田八郎左衛門より成田左次兵衛あて。

36、「十二用次第」 卷子本

常井喜兵衛直則より津軽玄蕃あて。日付、朱印・花押はない。

37、「五ヶ次第」 卷子本

伝系他36と同じ。

38、「切刃次第」 卷子本

伝系他36と同じ。

39、「合口次第」 卷子本

伝系他36と同じ。

40、「外物次第」 卷子本

伝系他36と同じ。

41、「外物次第」 内容が右と異なるが、伝系他36と同じ。

42、「歌之巻」 卷子本

伝系他36と同じ。

五、寶藏院十文字鑑

後に記す。

まえがき

101

当『文化紀要』第二九号(平成元二一九八九二・一五)の「津軽弘前藩の武芸00」では、寺山家が所蔵する津軽弘前藩「當田流棒(術)」の伝書類九点と「林崎新夢想流(居合)」の「指南許状」三点及び伝書類一六点を紹介した。今回は「林崎新夢想流(居合)」の残りの伝書類二三点と、新たに「寶藏院十文字鑑」の伝書類二一点を紹介するこ

とした。寺山家の所蔵する「寶藏院十文字鑑」の伝書類はこの一一点が全部である。

「林崎新夢想流（居合）」一三三三の授受の内訳は、①浅利伊兵衛均禄より八反田宇右衛門あて七点、②同じく樋口万之助あて一点、③浅利万之助均費より西館縫之助あて六点、④同じく佐和市之亟あて一点、⑤藤田八郎左衛門より成田左次兵衛あて一点、⑥常井喜兵衛直則より津軽玄蕃あて七点である。

右のうち、①から⑤までの文書の内容は前回とはぼ同じで重複することになるが、寺山家の所蔵する武芸文書資料として紹介することにした。⑥の常井喜兵衛より津軽玄蕃あての七点も前回の内容と重複するところはあるが、前回にはなかった「技」の名称が見られるところに特徴がある。これは津軽弘前藩「林崎新夢想流（居合）」の初期の頃の伝書形式をとっていると思われる。

同藩における「林崎新夢想流（居合）」の祖は常井喜兵衛であるが、この常井喜兵衛から授与された伝書として、津軽玄蕃あてが前述のように七点、浅利伊兵衛あても前回紹介したように七点寺山家に所蔵されている。両者を比較すると、どちらにも年記、朱印、花押がなく、この点は同じであるが、書体は異っている。内容にも相違があり、授与者の名称の表現も前者は「常井喜兵衛直則」とし、後者は「常井喜兵衛尉直則」と「尉」の一字を入れて微妙な違いがある。

もともと寺山家の文書は浅利伊兵衛の後胤が所蔵していたものであるので、津軽玄蕃あての伝書は直接入手したのではなく、写筆して保存していたものであろう。写筆としても津軽玄蕃あての伝書が残っていたことは珍らしい。

「寶藏院十文字鑑」一三三三の授受の内訳は、①高田平右衛門正重より唐牛兵九郎あて一点、②高田儀兵衛正茂より浅利伊兵衛あて三点、③桜庭又右衛門成美より浅利伊兵衛あて二点、④浅利伊兵衛より樋口弥三郎あて二点、⑤年記はあるが授受者無記名の伝書一点、⑥一戸三之介宗明より岩渕千治郎あて一点、⑦佐野吉郎兵衛より浅利万之助あて

一点である。

津軽弘前藩の「寶藏院十文字鑑」の祖は高田平右衛門正重であるが、弘前市立図書館にも所蔵されていない高田平右衛門の伝書が、寺山家にただ一点所蔵されていた。この伝書の記述形式、内容等は、他家に所蔵されている同流の伝書と比較して特徴があり、貴重な存在である。

「寶藏院十文字鑑」の伝書は数量として少ないようであるが、津軽弘前藩における同流の伝書の種類をほぼ包含しているのではないと思われる。

内容の紹介

凡例

- (1) 冊子本、卷子本等の表紙に題簽(箋)あるいは外題がある場合には、その題名は「」で示した。「」のない題名は、内容その他から推して仮りにつけた名称である。
- (2) 破損や虫害が甚しく、題名のつけ難い場合には「題名不詳」とした。
- (3) 体裁によって、卷子本、冊子本、折本、堅紙・折紙・切紙の四種に大別した。卷子本には、表紙や軸の失われているもの、あるいは始めから軸がなかったと思われる巻き紙のような様式まで含めた。
- (4) 古文書・記録等の紙質や縦・横の大きさ等は、特別なものと思われないう限り省略した。
- (5) 特定の人物、字句、事件等については本文の後に「注」で示し、全体にかかわる事件については「解説」の項を設けて説明を試みた。
- (6) 判読不明な文字は□で示した。
- (7) 色彩が必要と思われる資料の一部をカラー写真(※印)とし、本文の最後に一括して掲載した。ただし、必ずしも原本と同色でないことをお断りしておく。

四、林崎新夢想流居合（承前）

20、居合向之次第 一

卷子本

先の部分欠損、人物画により形の一部を示しているが、前回に掲載したので省略。

向次第（欠損）

押上（欠損）

押技

防身

除身

幕越

胸刀

頭上

○末真正

林明神

林崎 甚助重信

21、居合右身之次第 二

卷子本

全体の四分の三は切れて欠損、「右身之次第」の技五本のうち、最後の「臥足」以下のみ残存していた。

右身次第

臥足

○末真正

八反田宇右衛門殿

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太末照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均禄

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井嘉兵衛直則

浅利伊兵衛尉均禄

八反田宇右衛門殿

22、居合左身之次第 三

卷子本

軸はなく巻き紙の様式、人物画により形の一部を示しているが省略する。
朱印・花押はないが、右の「袖」に「印判」がある。

(印刷)

写真11※

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人目録

左身次第

開拔

左足

鞭詰

肢去拔

向足

○末真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井嘉兵衛直則

浅利伊兵衛尉均禄

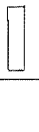
「八反田宇右衛門殿」

23、居合外物之次第 四

卷子本

軸はなく巻き紙の様式、人物画により形の一部を示しているが省略。朱印・花押はないが、右の「袖」に「印判」がある。

(印判)



林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人目録

外物次第

取違

寄足

寄身

懸蜻蜒

逆手

胸刀

逆頭上

○天真正

林明神

八反田宇右衛門殿

24、居合外物之次第 五

卷子本

「外物次第 五」は技三本と「高上位之巻」から成っているが、先の部分が欠損し、二本目から残存していた。

(頂上) (欠損)

切先廻

林崎 基助重信

田宮平兵衛照常

長野無兼斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均祿

二方詰

高上極位之巻

抑此兵術者自己默然而

無進莫退左右又如斯唯是

逢源至劒刃上走氷凌上於生

死岸頭得大自在向六道四

生空古人云世間空空無佛

性空之真按之右之兵術是也

千金莫傳可秘々々

唯授一人

萬事拔



千金位



○末真正

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎權露

一宮左太未照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均祿

八反田宇右衛門殿

25、居合秘歌之巻 六

卷子本

先の部分が少し切れている。右の「袖」に「印判」がある。

(印)

秘歌之大事

① 千八品本草薬と聞しかと

とのやまひに(病)としらて詮なし

② 早なく遅はあらしおもくなく

軽き事を(患)ハあしきとそいふ

③ 居合とハ人に切られす人切らす

たゝ請留(平)てたいらかに勝

④ 本乃我に勝か居合の大事也

人にさかふハ非方なりけり

⑤ 鰐ハ唯拳乃たてと聞ものを

ふとくもふとくなきハひかこと(太)

⑥ つよみにて行あたるをハ下手といふ

まりと柳を上手とそいふ

⑦ 居合とハ押詰ひしとおす力

刀ぬくれハやかてつかるゝ

⑧ 後よりたますに手こそなかりけり

こゑ乃拔とや是をいふらん

⑨ 世はミにて勝をとるへきなか刀(狭)

短きかたな利ハうすきなり

⑩ 世中に我より外のものなしと

思ふハ池乃蛙なりけり

⑪ 下手こそハ上手の上のかさり物

返くもそしりはしすな

⑫ 抜ハ切るぬかねハきれよこの刀

たゝきる事に大事こそあれ

⑬ 浮草をかきわけミれは底の月

爰に有とハいかてしられん

⑭ 居合とハ心にかつか居合なり

人にさかふハ非方なりけり

⑮ 人いかに腹を立つゝいかるとも

心にかたなこふしはなすな

⑯ ひしとつく丁と留るハ居合也

抜ぬに切るハ我をかいする

⑰ 二人にハ勝れさりけり忍刀て

劔に恐れて手ハ出さりけり

- ⑮ 居合とはよはみ斗て勝ものを
(弱み) (よかり)
(強み)
 つよミて勝ハ非方なりけり
- ⑯ 見よやミよ憂世を渡る濱洲
(見)
- ⑰ 魚と水とのかゝり火の影
(かゝる)
- ⑱ 世はひろし折に寄てそ替らん
(かゝる)
- ⑲ われ知る斗よしとおもふな
- ⑳ 白(刃)にむかふ七つをたのミにて
(刃)
- ㉑ ひたり右りをなにと防かん
(元)
- ㉒ こんたい乃両部の二つミへにけり
(金胎)
- ㉓ 兵法あれハ居合はしまる
(始)
- ㉔ いたらぬに免好をする人は
(ゆるし) (のみ)
- ㉕ 居合乃恥を我とかくなり
- ㉖ 寒夜にて霜を聞へき心こそ
 敵に逢ての勝を取へし
- ㉗ 執心のあらん人にハつたふへし
- ㉘ くらひ残すな大事なること
(間) (一) (巻)
- ㉙ 引もまよかゝるも間とハ知なから
 抜かぬに切は非方なりけり

⑳ 切結ふ太刀に姿乃かはらすハ

勝れぬまでもたのもしきかな
(頼)

○天真正

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均祿

八反田宇右衛門殿

26、居合極位相傳之巻

右の「袖」に「印判」がある。

卷子本

(印刷)



柳居合者奥劔從林之明神

夢想傳之夫兵法者上古中古

雖有數多此居合末世相應之

太刀手近之勝負一命之有無

極此居合恐於粟散邊土之

堺不審之儀不可有之唯靈夢

依所也尋此始或時奥州林崎

甚助謂者依兵法之望林明神

百ヶ日參籠滿曉夢中告云

汝以此太刀常胸中憶持得

勝怨敵云々則如靈夢成得

大利腰刀以三尺三寸勝九寸五分

表六寸而勝之妙不思儀之

極位一國一人之相傳也腰

刀三尺三寸者過現末之三心

三身則三寶也王法是為三劔

禪門有十八種劔六種劔十二

種劔又是濟家宝中重代

衲僧截斷修行也殺人刀活

人劔都在掌握中脇指九寸

五分者九品蓮葉劔出離憂

苦海中生死魔軍追倒釋

道九曜五古之内證也是則為

曹洞五位之秘訣敵味方成事

是亦前生之業感也生死一轉而

百戰場中便大舜光土也如斯

觀事現也

广利支尊天之護身符也此居合

千金賜以不貴但於實當之人

可傳附之兵利心懸者晝夜

思之祈神明之息得利正見

心濟身耳

畢竟默然良久云

珊瑚枝々撐着月

○末真正

林明神

林崎 基助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均椽

八反田宇右衛門殿

27、居合極位相傳之卷

卷子本

軸がなく、巻き紙の様式、日付・朱印・花押はないが、右の袖に「印判」がある。

(印判)

柳居合者奥州從林之

明神夢想傳之夫兵法

者上古中古雖有數多

此居合末世相應之太刀

手近之勝負一命之

有無極此居合恐於粟

散邊土之堺不審之儀

不可有之唯冥夢

依所也尋此始或時奥州

林崎甚介謂者依兵法之

望林之明神百ヶ日參籠

満曉夢中告云汝以

此太刀常胸中憶持

得勝怨敵云々則如冥夢

成得大利腰刀以三尺三寸

勝九寸五分表六寸而勝之

妙不思議之極位一國
一人之相傳也腰刀三尺
三寸者過現未之三心
三身則三宝也王法是
為三劔禪門有十八種
劔六種劔十二種劔
又是濟家宝中重代
衲僧截斷修行也殺人
刀活人劔都在掌握中
脇指九寸五分九品蓮葉
劔出離憂苦海中
生死魔軍追倒釈道
九曜五古之内證也是則
曹洞五位之秘訣敵味方
成事是又前生之業
感也生死一軀而百戰
場中便大舜光土也
如此觀事現世

广利支尊天之護身
符也此居合千金賜以
不貴但於実当之人可
傳附之兵利心懸者
晝夜思之祈神明之
息得利正見依心濟
身耳

畢竟默然良久云
珊瑚枝々撐着月

○天真正
林明神

林崎 甚助重信
田宮平兵衛照常
長野無染斎謹露
一宮左太夫照信
谷小左衛門季世

樋口萬之助殿

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛均禄

除身

幕越

胸刀

頭上

28、居合向之次第 一

卷子本

軸がなく巻き紙の様式。「袖」に「印判」があつたと思われるが、先の部分が欠損しているので見えない。人物画により形の一部を示しているが、前回に紹介したので省略する。

○末神正
林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

浅利伊兵衛尉

浅利万之助均費

西館縫之助殿

林崎新夢想流居合
極位秘術唯授一人
目録

向次第

押立

押拔

防身

29、居合右之次第 二

卷子本

右の「袖」に「印判」がある。

(印判)



林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

右身次第

突入

抜詰

手取扱

柄取

臥足

○大真正

林明神

林崎 甚助重信

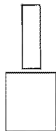
田宮平兵衛照常

30、居合左身之次第 三

卷子本

右の「袖」に「印判」がある。

(印判)



林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

左身次第

開拔

西館縫之助殿

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

浅利伊兵衛尉

浅利万之助均費

左 足
鞭 詰
肢 去 抜
向 足

○末真正

林明神

西館縫之助殿

林崎 甚助重信
田宮平兵衛照常
長野無楽斎權露
一宮左太夫照信
谷小左衛門季正
常井喜兵衛尉直則
浅利伊兵衛尉
浅利万之助均費

31、居合外物之次第 四

先の部分が欠損している。

卷子本

林崎新夢想流居合
極位秘術唯授一人
目録

外物次第

取 違

寄 足

寄 身

懸蜻蜒

逆 手

胸 刀

逆頭上

○天真正

林明神

林崎 甚助重信

32、居合外物之次第 五

卷子本

右の「袖」に「印判」がある。

(印判)



林崎新夢想流居合
極位秘術唯授一人
目録

外物次第

西館縫之助殿

田宮平兵衛照常
長野無業斎権露
一宮左太末照信
谷小左衛門季正
常井喜兵衛尉直則
浅利伊兵衛尉
浅利万之助均費

頂上

切先廻

二方詰

高上極位之巻

柳此兵術者自己默然而無
進莫退左右又如斯唯是逢
源到劔刃上走氷陵上於生
死岸頭得大自在向六道四
生空古人云世間空々無佛性
空々真按之右之兵術是也
千金莫傳可秘云々

唯授一人

萬事抜



千金位



○天神正

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無業斎權露

一宮左木夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

浅利伊兵衛尉均祿

浅利万之助均費

西館縫之助殿

33、居合極意相傳之卷

卷子本

最後の伝系の部分が欠損し、あて名も不詳であるが、印判からみて浅利万之助均費より西館縫之助あてと思われる。

(印判)

写真②※

柳居合者奥州從林之

明神夢想傳之夫兵法

者上古中古雖有数多

此居合末世相應之太刀

手近之勝負一命之有

無極此居合恐於粟散邊

土之堺不審之儀不可有之

唯靈夢依所也尋此始

或時奥岳林崎甚助謂者

依兵法之望林明神百ヶ日

参籠満曉夢中告云汝

以此太刀常胸中憶持得勝

怨敵云々則如靈夢成得大

利腰刀以三尺三寸勝九寸
五分表六寸而勝之妙不思
儀之極位一國一人之相
傳也腰刀三尺三寸者過現
未之三心三身則三宝也
王法是為三劔禪門有十
八種劔六種劔十二種劔又
是濟家宝中重代衲僧
截断修行也殺人刀活人
劔都在掌握中脇指九
寸五分者九品蓮葉劔
出離憂苦海中生死魔
軍追倒釋道九曜五古
之內證也是則為曹
洞五位之秘訣敵味方
成事是亦前生之業
感也生死一鉢而百戰場
中便大舜光土也如此觀

事現世

广利支尊天之護身符也

此居合千金賜以不貴但

於實當之人可傳附之兵利

心懸者晝夜思之祈神

明之息得利正見依心濟

身耳

畢竟默然良久云

珊瑚枝々撐着月

○末真正

林明神

林崎 甚助重信

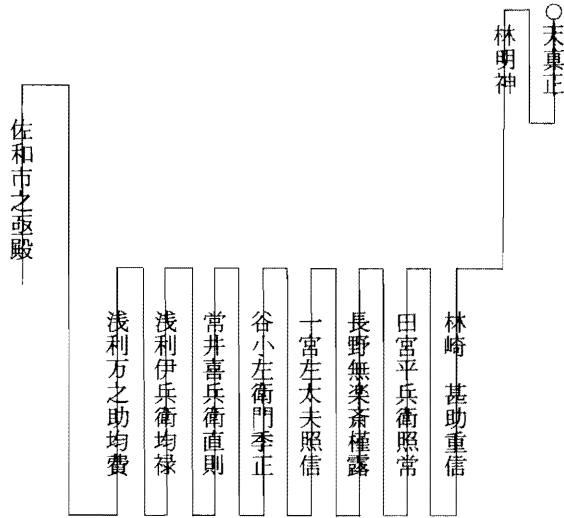
34、居合左身之次第 三

卷子本

前半の欠損が大きいが内容は「左身次第」である。

35、居合外物之次第 五

卷子本



鞭 詰
肢去拔
向 足

二方詰

高上極位之卷

抑此兵術者自己默然而

無進莫退左右又如斯唯

是逢源到劔刃上走水陵

上於生死岸頭得大自在

向六道四生空古人云世間

空々無佛性空空真也

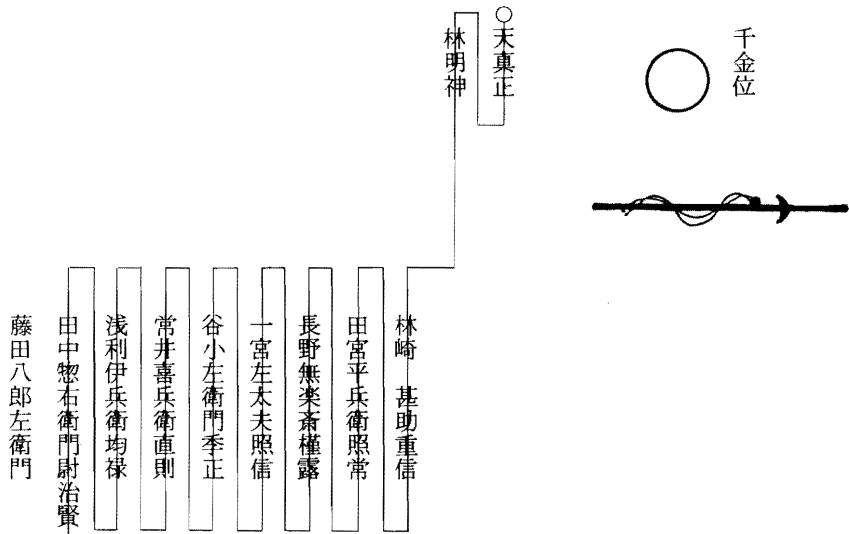
按之右之兵術是也

千金莫傳可秘々々

唯授一人

萬事拔

全体のほぼ三分の一が欠損しているが
内容は「外物次第」である。



- 36、「十二用次第」
- 卷子本
- 軸はないが模様の入った巻物用の料紙
を使用している。人物画はなく、太刀を
図示して太刀さばきを表わしている。
(省略)
- 林崎新夢想流
居合極位秘術
唯授一人目録
十二用次第
第一
第二
第三
第四
第五
第六

(一七四二)
寛保二年十二月吉日

(花押)

成田左次兵衛殿

第七
第八
第九
第十
第十一
第十二
天真正
林明神

林崎 甚助重信
田宮平兵衛照常
長野無楽斎謹露
一宮左太夫照信
谷小左衛門季正
常井喜兵衛直則

津軽玄番殿

37、「五ヶ次第」

卷子本

人物画をもつて形の一部を示している。
(省略)

林崎新夢想流
居合極位秘術
唯授一人目録
五ヶ次第

懸身
待身
右剣
左剣
聲拔
天真正
林明神

林崎 甚助重信
田宮平兵衛照常
長野無楽斎謹露

38、

「切刃次第」

卷子本

人物画をもって形の一部を示している。

(省略)

津軽玄番殿

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

第 四

第 五

第 六

第 七

天真正

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

津軽玄番殿

39、「合口次第」

卷子本

第一
第二
第三

切刃次第

目録

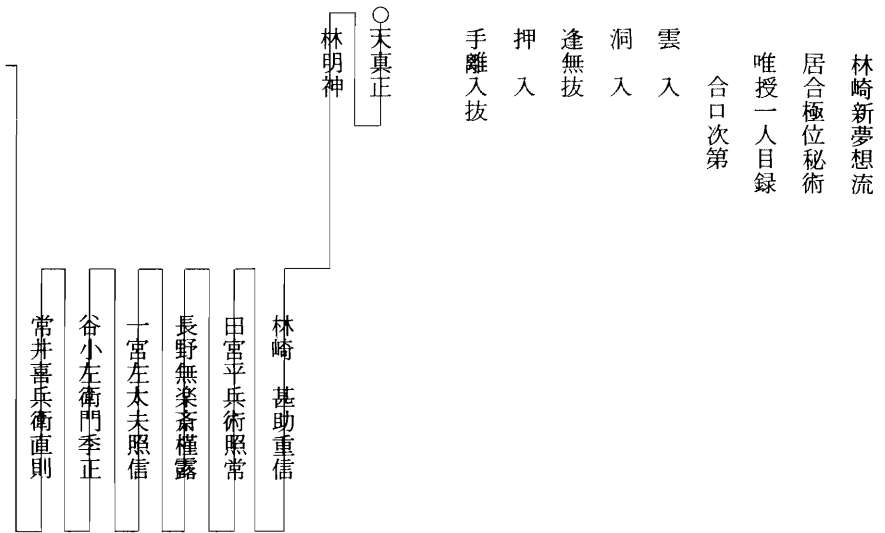
秘術唯授一人

流居合極位

林崎新夢想流

人物画をもって形の一部を示している。

(省略)



40、「外物次第」

人物画をもって形の一部を示している。
(省略)

津軽玄番殿

林崎新夢想流
居合極位秘術
唯授一人目録
外物次第

取違
寄足
懸蜻蜒
逆手
胸刀
逆頭上

天真正
林明神

卷子本

41、「外物次第」

卷子本

人物画をもって形の一部を示している。
(省略)

津軽玄番殿

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

二方詰

糸車切留

柄取

直刀

大嵐

小嵐

目付拔

鉄輪

四方詰

向大脇指

同大脇指

左右大脇指

向立合大脇指

同立合大脇指

下刀

林崎新夢想流

居合極位秘術

唯授一人目録

外物次第

頂上

切先廻

○天真正

林明神

42、 「歌之巻」

卷子本

秘歌大支

津輕玄番殿

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無業斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

① 千八品本草薬と聞しかと

とのやまひにとしうて詮なし

② 早くなく遅ハあらし重くなく

かるき事をはあしきとそいふ

③ 居合とハ人にきられす人きらす

たゞ請とめてたいらかに勝

④ 本の己れに勝か居合の大事也

人にさかふハ、非方也けり

⑤ 鏢ハ只拳乃たてと聞ものを

ふとくもふとくなきハひかこと

⑥ つよミにて行あたるをは下手と云

まりと柳を上手とそいふ

⑦ 居合とハ押詰ひしと出す刀

かたなぬくれハやかてつかるゝ

⑧ 後よりたますに手こそなかりけれ

聲の抜とや是をいふらん

⑨ せはミにて勝を取へきなか刀

みしかき刀利ハうすき也

⑩ 世中に我より外のものなしと

おもふハ池の蛙也けり

⑪ 下手こそハ上手の上乃かさり物

かへすゝもそしりはしすな

⑫ 抜は切るぬかねはきれよ此刀

たゝ切事に大事こそあれ

- ⑬ 寢(いふく)をかきわけ(いふく)ミれは底の月

爰に有とハいかてしられん

- ⑭ 居合とハ心に勝か居合なり

人にさかふハ非方也けり

- ⑮ 人いかに腹を立つ(いかに)ゝ嘖(いかに)とも

心に刀こふしはなすな

- ⑯ ひしとつく丁ととむるハ居合也

抜ぬにきれば我をかいする

- ⑰ 二人にハ勝れさりけり忍刀て

剣(出)に恐て手ハてさりけり

- ⑱ 居合とハ弱ミ斗て勝ものを

つよミて勝ハ非方也けり

- ⑲ 見よやミよ浮世を渡る濱渕

魚と水との篝火乃影

- ⑳ 世ハ廣し折に寄てそかへるらん

我(知) (いかり)しる斗よしと思ふな

- ㉑ 白(刃)にむかふ七ツを頼ミにて

ひたりミきりを何と防ん

- ㉒ 金躰(船)の両部の二つみえにけり

兵法あれば居合はしまる

- ㉓ 至らぬに免好をする人は

居合の恥を我とかく也

- ㉔ 寒夜にて霜を聞へき心こそ

敵に逢ての勝を取へし

- ㉕ 執心乃あらん人にハつたふへし

位残すな大事なること

- ㉖ 引も間よかゝるもまとハ知なから

ぬかぬに切ハ非方也けり

- ㉗ 切結ふ太刀に姿のかへらすは

かたれぬ迄も頼母しきかな

天真正

林明神

林崎 甚助重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

津輕玄番殿

解説

1、天真正について。「林崎新夢想流」の伝書の奥書には、先ず上段に「天真正」「林明神」の二者を並べて列挙し、次にその左下段に実在した流儀伝承者の氏名を書き連ね、最後の行のやや上段に被授与者の氏名を書いている。伝書における右のような奥書の記載形式は、年記や添書きの有無も時には関係するが、どの流儀もほぼ同じである。

ところで、この解説で述べようとする「林崎新夢想流」の「天真正」と「林明神」に該当する箇所には、他の流儀、例えば寺山家の所蔵する伝書「當田流太刀」「當田流棒」では「鵜戸大権現」と書かれているし、「寶藏院十文字鍵」では「奈良住元祖寶藏院」と書かれている。この書き方をみると、この箇所には何れもその流儀の実在した元祖名か、あるいはその元祖に秘術（流儀の特質を示す術技）開眼の契機を与えたと思われる武神（神社名）を挙げている。

さて、「林崎新夢想流」では、どのような経緯で「天真正」と「林明神」とを書くようになったのか、その経

緯と思われる幾つかを考察してみたい。ただし「林明神」については、この流儀の創始者・林崎甚助重信が林崎明神（拙著『津軽前藩の武芸』⑩『文化紀要』第二十九号一九八二頁一九八九参照）に参籠して居合秘術の開眼に契機を与えたという、その「林崎明神」を意味する。この経緯については、前回既に述べたので省略し、ここでは主として「天真正」を掲げるに至った経緯を述べることとする。

① 「林崎新夢想流」よりも古く、いわば日本武術の伝書に最初に「天真正」を奥書に掲げた流儀は、飯篠山城守（いいね）（後に伊賀守）家直（入道し、長藏前）を祖とする「天真正伝香取神道流」である。略して「天真正伝神道流」「香取神道流」「神道流」とも云っているが、祖を同じくしながら塚原卜伝高幹は「心当流」と称していた。（今村嘉雄『日本武道大系第三』一九八二） また、同じ飯篠直系でも「新当流」と称することもあった。この流儀の系統に属する各派の伝書の奥書は、何れも先ず「天真正」から書き起し、それから実在した伝承者の氏名を列記している。このことは「林崎新夢想流」の伝書の奥書に「天真正」を掲げるようになった経緯を知るひとつの手がかりとして、注目しておく必要がある。

② 右の「神道流」が掲げる「天真正」という、実在する人物名でもなく、また武神、神社名でもない呼称が何を意味するのか理解しておかねばならない。この理解のために「天真正」という語が奥書にではなく、文章の中に表現した神道流第七代飯篠大炊頭盛繁の著「新当流兵法書」の一節（前後省略）を次に挙げて参考にした。

「飯篠長威、奥山自恩（註）兵法一秘術伝。仍（無）先実法、於当社之御神前、久奉参籠。了百日寅一点詣。然曰、天真正、我胸剣術秘。汝深々感懇志。応安二年（一三六九）五月五日、同乃一点以御神秘術、授与彼長威公。謹而秘干世当流弘。」（飯篠長威、奥山自恩（註）の兵法秘術を伝う。実法無きに仍て、当社の御

神前に於て、久しく参籠し奉る。百日を了りて寅の一点に詣ず。然るに曰く、天真正は我が胸の剣術の秘なり。^(一)汝が深々の、懇志に感ずと。応安二年五月五日、同の一点に御神の秘術を以て、彼の長威公に授与す。^(二)謹みて秘かに世に当流を弘む。^(三)

(一)今村嘉雄『日本武道大系第
三巻』既述一五二―一六頁)

右の文面の「当社の御神前」の「当社」というのは「香取神宮」である。もともと飯篠家直は「下総国香取郡飯篠村(今の千葉県香取郡多古町飯篠)の人であり、後に同州山崎村(千葉県佐原市丁字山崎。香取神宮の北東隣)に移った」^(一)と云われる。祭神を経津主神(ふつぬしのかみ)とする香取神宮は、鹿島神宮とともに武神として尊崇を受けていたから、飯篠家直が武芸の心技開眼のために参籠祈願に至ったことは容易に推察することができる。そしてその参籠祈願の結果、香取の神の啓示によって遂に深い境地に達し術技に開眼したと思われる。

それでは、奥書のその箇所に「香取神宮」と書かずになぜ「天真正」としたのであろうか。

③ 思うに、参籠祈願は心身を統一し、激烈な鍛錬に集中することと考えられる。そのため、祈願によってある啓示から深い境地に達し術技に開眼したとしても、それは終始自分自身の苦心と工夫の結果によるものと云わなければならない。しかし飯篠家直はそれを己れの力にのみよるのではなく、香取の神の力添えにより開眼し到達できた術技と解したと思われる。それでもなおかつ「香取神宮」と書かずに「天真正」としたのは、香取の神の啓示を開眼の直接の契機と信じながら、香取の神から鹿島の神、八百万の神と広大無辺の神々の恩恵を思い、しかもそれらの神々と一体化した自分を信じ、その様相を表現するためではなかったかと思われる。

「天真正」は、まさに神々と一体化した己れ自身の様相を示していると考えられる。

④ 「天真」の語は、漢和辞典や佛教語辞典などによれば「作為や造作を加えない本来のままであること」と説明している。「本来のまま」であることは、宗教的には神佛と自分の一体化、得悟のことと思われる。飯篠家直のみでなく、他の武者者が「天真」の境地に至る経緯をもう一例次に示しておきたい。

これは、「一刀流組太刀最後の名人と云われる寺田五右衛門宗有（一七四五—一八二五）の創始した天真一刀流（一刀流天真伝兵法）」（渡辺一郎「撃劔難波之模」『雑誌』（『武道』七〇頁、一九七六、三月号））の門弟・白井亨義謙の著『兵法道志留辺』に、寺田宗有の「天真」の境地に至る経緯を述べた一節である。

「参玄練丹ニ神ヲ凝シ、大誓願ヲ発シ、或ハ数日断食水浴シテ其ノ真ヲ極メントスル者数次、或ハ灌水ノ法ヲ修シ、水浴ニ三百箇ニ至ル事数十年、壮ヨリ八旬ニ至ル迄練丹自強スル事夙夜懈ル事ナク、終ニ一旦豁然トシテ見性得悟ノ大事ヲ究メ、仏祖不伝ノ妙、其ノ天真ニ貫通スル事ヲ得タリ」（渡辺一郎編『武道の名著』（東京コビー出版部、一六二頁、一九七九））

⑤ 次に飯篠山城守家直を祖とする「天真正伝香取神道流」の伝書に掲げられる「天真正」が、なぜ「林崎新夢想流」の伝書に書かれるようになったのか、その関わりに触れておかなければならない。これは「神道流」と「林崎新夢想流」の祖林崎甚助重信との関係を述べることになるのであるが、両者の関係を証するに足る充分な資料がない。もともと飯篠家直（長威斎）も林崎甚助も、その履歴には諸説があり、必らずしも明確な定説があるというわけではないのである。ただ林崎甚助について

「一説には、最上家につかえ、飯篠長威斎の神道流を学び、二十五歳のとき楯岡の林崎明神に参籠して、夢想剣を感得、慶長三年、武州一の宮に来て一宮左太夫に教え、元和二年（一六一五）奥州に出発、以後消息不

明とも」(今村嘉雄『日本武道大系』第三巻『脱出』四五〇頁)

云われている。この出典が明らかでないが、「林崎新夢想流」の奥書に「天真正」に掲げるところをみると、右のように林崎甚助は飯篠家直に師事したことがあり、それを証する意味をもつのかも知れない。

2、袖印判について。本文の書き出しの右の余白を「袖」といつているが、この「袖」に捺印され印判のある伝書が数点あり注目される。

本資料の浅利伊兵衛均禄より八反田宇右衛門あての伝書22、23、25、26にこの「袖印判」があり、先の部分が欠損している20、21、24の伝書にもこれがあったと思われる。樋口萬之助あての27の伝書にも「袖印判」が見られる。同じ様に浅利万之助均費より西館縫之助あての伝書29、30、32、33にも「袖印判」があり、先の欠損している28、31にもこれがあったと思われる。

浅利伊兵衛均禄が授与した伝書の「袖印判」は上下に並んで二つあり、上の印文は「浅利」(陽刻)、下の方の印文は「均禄」(陰刻)で伊兵衛の実名である。

浅利万之助均費が授与した伝書の「袖印判」も、右と同じ様に上の方は同じ印章を使用した「浅利」の印文であり、下の方は印文「均費」で、万之助の実名である。

「浅利」(陽刻)と「均費」(陰刻)の印章は、寺山家に現在も保存されている。

写真(3)参照

「浅利」の印章は当時から二百数十年にわたって使用されたと思われる、印字は相当に擦り減っている。

3、樋口萬之助について。資料27は「樋口萬之助」あてに浅利伊兵衛均禄が授与した伝書である。この「樋口萬之助」は樋口衛門の二男と推察される。後に浅利伊兵衛の養子となり、浅利萬之助均費と名乗った。また「當田流太刀」「當田流棒」「林崎新夢想流(居合)」を継承し、門弟の育成に当った人物である。

養子の件については『高照宮御遺鑑・卷二十二』(弘前市立弘前図書館蔵)に次の一節があり参考となる。

浅利伊兵衛均祿、享保三^{戊辰}年(一七二八)十月廿五日命日、法号ハ無庵幽生居士、曹洞宗弘前大平山長勝寺構之内京徳寺に墓所有。

一子浅利佳右衛門早世す。養子樋口衛門二男を願家督被下。浅利万之介、太刀・鎧・居合許迄極め、道場を張、門弟有来。(以下略)

右の文にも資料27の伝書にも年記がなく、万之助が養子となって家督を継いだ時期は不詳である。ただ養子となる前に浅利伊兵衛の門弟であり、「林崎新夢想流」の許状を得ていたことは事実である。

4、千金位について。資料24、32、35は「居合外物之次第・五」という伝書であるが、その「高上極位之卷」に「千金位」の語が見られる。この「千金位」は「許」を意味している。『高照宮御遺鑑・卷八』(既出)の「居合秘妙」の項に次の一節があり参考となる。

居合諸流有るといへ共、林崎新夢想流などは中興の名誉、其の教数流に勝るべし。此の流にて許を千金の位と定め、印可を千機の位と言ふ。

許までハ先を争ふて勝負を極る。世間躰の教の場、理の形様、少し悪くハ武藝に不被入の非に落事難有也。印可の千機の位と先々の先、無先の先を示すを以て武道武業の真実を明らかにして武藝至極の場也。武術の勝負こゝにおいて極躰とす。以て名人に至らずしてハ其の場を行ふ事不能。人ごとに及びがたし。世上躰の居

合の上手と云ふ共此の処は不知事なり。然れば武藝に不被入も其の理あり。千機の位を得て自在有るものは居合といへども劔術全勝の極秘を行ふに至るに依て、武藝の外に成るべき難尽と言ふべし。

なお、寺山家所蔵する「林崎新夢想流」の伝書の中で「千機の位」を示す伝書が一点ある。それは前回紹介した資料18「居合印可高上極位之巻」で、「正徳五^{乙未}（一七一五）八月五日」浅利伊兵衛均禄あての伝書である。

5、津軽玄蕃政朝と「林崎新夢想流」居合

津軽玄蕃（慶安元年（一六四八）一七〇五（宝永二年））は、弘前第三代藩主津軽信義の第四子、すなわち第四代藩主信政の弟である。父信義の弟津軽百助信隆の養子となって万治二年（一六五九）家督相続（一二歳）一六〇〇石、寛文五年（一六六五）に玄蕃と改名、書院大番頭、城代を歴任し、寛文八年四〇〇石加増されて家老になるという同藩切つての高級武士である。

文武に優れていたが、武芸においては特に馬術、柔術に秀で、馴縄流馬術、本覚克己流柔術の流儀創立にかかわっている。

居合については、「林崎新夢想流」の津軽弘前藩の祖常井喜兵衛直則の第一の門人と云われていた。（青森県文化財「津軽藩旧記伝類」二五（二六頁）一九八二、参照）ただ、常井喜兵衛の第一の門人と云われても、これを証するに足る資料がなかったが、本資料の36から42までの伝書七点の出現で一応納得できるようになった。そしてこれらの伝書には年記はないが、浅利伊兵衛より先に伝授されていたのではないかと思われる。

浅利伊兵衛が棟方嘉兵衛より伝書の授与のあったのは、正徳五年（一七一五）八月五日か享保元年（一七二六）八月五日の何れかである。「（浅利伊兵衛）均禄夢想居合極意之巻」を書いたのが延宝八年（一六八〇）九月十

一日（『文化紀要』第二十九号（一九八九年）居合の項参照）であるが、先の伝書の授与の期日と、津軽玄蕃の生存期間を考えると、津軽玄蕃への授与が早かったと思われる。

常井喜兵衛と津軽玄蕃と居合を通しての関わりについて次のような説話がある。

或時津軽政朝御城進出の砌、渠常井則直も当番下り杯にもや、政朝に御同道申たるに、折しも四月の頃にもや、下乗橋に行懸りしに、例之燕共飛かふて比羅々々瞬息の間なかりしに、政朝喜兵衛に被申は、棟の乙鳥か飛廻候躰、御自分出口に而打留られはやといふに、心得たりと其詞之未だ終らざるに、電光稲妻影の如く、水も不溜燕は二ツに成て橋之上に落たりけると。其技も治も目にたゞばこそ、流石の政朝も大に驚感有、言ふ詞もなく黙して別れ給ひしと、政朝後歎して其術にて被召出たる者と言。殊に人の奥意の義素骨無遠慮申たりと後悔せられしと也。尚又渠燕を切りおほせたること幸なれ。万々切損たらんは我こそ二ツならんと被申しと也。尤則直より居合開伝は仕給ふ也。（『新編青森県書刊行会編『新編青森県書』（書六六）歴史図書社七頁一九七三）

五、寶藏院十文字鑑

写真（四）※

1、寶藏院十文字鑑許卷 二

卷子本

慶安四年（一六五一）二月九日、高田平右衛門正重より唐牛兵九郎あて。この流儀で寺山家に残る最も古い資料。前の部分が欠損している。

2、寶藏院十文字鑑許卷 一

卷子本

内題「寶藏院流名目録」

3、寶藏院十文字鑑許卷 二

延寶四辰（一六七六）九月十五日、高田儀兵衛正茂より浅利伊兵衛あて。

内題「寶藏院歌之書」

延寶五巳(一六七七)七月吉日、高田儀兵衛正茂より浅利伊兵衛あて。

- 4、「寶藏院十文字鑑許卷 三」 卷子本

天和二壬戌(一六八二)八月十五日、高田儀兵衛正茂より浅利伊兵衛あての「免状」

- 5、「寶藏院流紅之書」 卷子本

元禄十四丁巳(一七〇一)十一月吉日、櫻庭又右衛門成美より浅利伊兵衛あて。

- 6、寶藏院十文字鑑印可状 卷子本

寶永元甲申(一七〇四)十二月十三日、櫻庭又右衛門成美より浅利伊兵衛あて。

- 7、寶藏院十文字鑑許卷 一 卷子本

内題「寶藏院流名目録」

- 8、寶藏院十文字鑑許卷 二 卷子本

内容「寶藏院歌之書」

- 9、寶藏院流紅之書 卷子本

浅利伊兵衛より樋口弥三郎あて。日付及び朱印・花押はない。前の約半分は欠損している。

- 10、寶藏院許卷 卷子本

享保二丁酉年(一七一七)八月吉祥日記入とあるが、記載者、あて名はない。

- 11、「寶藏院許卷」 卷子本

内容「寶藏院流名目録・寶藏院流歌書・寶藏院流許卷」

- 延享四卯年(一七四七)、一戸三之介宗明より岩渕千治郎あて。朱印・花押はない。

内容「寶藏院流名目録・寶藏院流歌書・寶藏院流許卷」

寶曆四甲戌(一七五四)九月吉日、佐野吉郎兵衛正辰より浅利万之助あて。

あとがき

1、寶蔵院十文字鑑許卷 二

卷子本

前半および上部の破損が大きい。

写真(5)

夫兵法者不動明王

(愛染) (3) (按前)

□□□□妙有何ソ

(待貝) (11) (4)

間去テ船橋ヲ勘哉

(退) (8)

□□足不有理一心

(待貝) (6) (17)

聞而無得理死定逢

(退) (8)

□師親之傳仍之疑

有哉

(鳴子)

なるこをは己かはかせに

(羽風) 写真(6)

ひきたてゝ

(壁) (むらすずめ)

心とさへく村権かな

(染)

そめ出す人はなけれど

春くれは



写真(6) 「寶蔵院十文字鑑許卷二」(1) 前の部分が欠損している。

(柳)
やなきはみとり花ハ

(紅)
くれなる

(二)
しら露ハをのか姿の

なきまゝに

(紅葉)
もみちに置し

(紅)
くれなるの玉

写真(7)

聖人法秘

非秘為傳⁽⁹⁾

一目羅⁽¹⁰⁾不能得鳥

得鳥羅者是一目

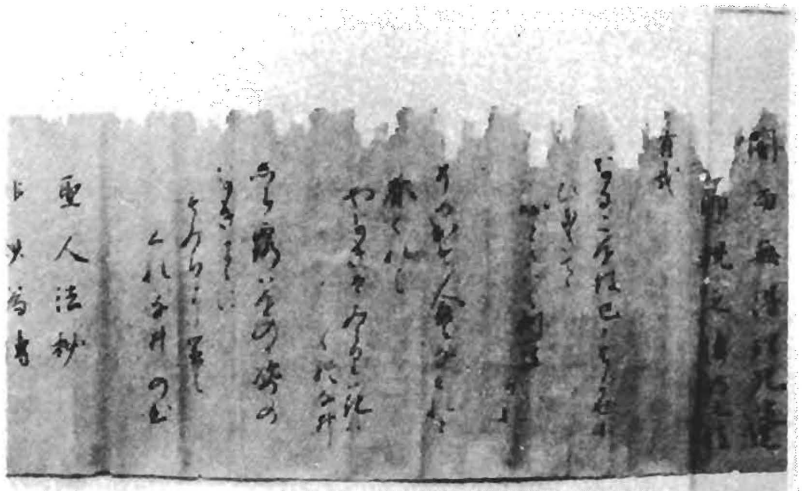
獅子忿嗔之旨⁽¹¹⁾

前三後一⁽¹²⁾

右此一巻御執心之旨

令相傳早聊他見有

間敷者也



写真(6) 「寶藏院十文字鍵許卷二」(2)

慶安四年
(一六五)

高田平右衛門尉

二月九日

正重(花押)

唐牛兵九郎殿

江



写真(7) 「寶藏院十文字鍵許卷二」(8) 高田平右衛門正重の花押がある。

注(1) 「夫兵法者不動明王□□□□妙有」虫害による不明の文字は、資料3から推して「愛染按前」の四字と思われる。従って

こゝは「夫れ兵法は不動明王愛染の按前に妙有り」と読むことができる。

右の「不動明王・愛染(明王)」の書き出しは、慶長二十年(一六一五)六月吉日、流祖宝蔵院流胤栄の高弟・中村市右衛門直政(宝蔵院流・中村派の祖)が高田八兵衛(宝蔵院流・高田派の祖)に与えた「宝蔵院流手継書」の書き出しに似ている。すなわち次の一節である。

「夫兵法者表不動愛染二明王也。迷而行之則却而受災難、悟而勤之則忽得勝利。能伝之能可秘之」

(夫れ兵者は不動・愛染二明王を表する也。迷ひて之を行ずれば則ち却つて災難を受け、悟つて之を勤むれば則ち忽ちに勝利を得る。能く之を伝ひ能く之を秘すべし。)(今村嘉雄『日本武道大系第七巻』同朋社、二二七―二二九頁、一九八二)

なお今村嘉雄は「手継書」とは「師匠の最高資格を高弟に継承させる意味の証書」であり、「唯授一人の伝授状」であるとし、また、この「手継書」における書き出しの「夫兵法者表不動愛染二明王也」との表現は、他の宝蔵院流諸派の伝書には見当たらないとも述べている。

右の「手継書」の書き出しと、今村嘉雄の所見から本資料の特徴を挙げるならば、第一に、これを授与した高田平右衛門正重は「宝蔵院流手継書」の存在を意識して書いたのではないかと思われること、第二に同流の他の伝書と比較して表現の仕方に古い形式をもっていること、第三に表現の内容は高度な印可状を意味していると思われることにある。

なお「迷而行之則」以下の文は、後述の参考のために挙げておいた。

(2) 不動明王 怒りの姿に偉大な力を示すもろもの明王の中心の尊。大日如来に代って修行者を守る。如来の命を受けて忿怒の相を示す。行者に給仕して諸事をなし遂げ、菩提心をおこさせ、悪を断じて善を修し、大智慧を得て成佛させるはたつきがあるという。火生三昧に入つて一切の罪障を破り、動揺しないから不動という。(中村元『佛教語』)

(3) 愛染明王 愛欲など心の迷いを、そのままさとりにつなぐることを示す明王。大日如来か金剛薩埵を本地とする。外相は忿怒暴悪のすがたであるが、内証は愛をもって衆生を解脱させる意図がある。(中村元『佛教語』)

(4) 按前に妙有り 「按」には「しらべる」「かんがえる」「たづねる」などの意があり、また「案」に通ずるという。

この文意には前述の「迷而行之則却而受災難、悟而勤之則忽得勝利」との関係が内在していると思われる。すなわち「不動・愛染二明王」に対して何を按ずるのかといえは、迷つて災難を受けるとか、悟つて勝利を得るとか、災難か勝利かという

(諸様集、大漢和辞典、参照)

ことへのこだわりを指しているのではないかと思われる。文意は、このような「こだわり」からの解脫あるいは貫徹の暁に「妙有り」というのではなからうか。しかしこの「こだわり」から解脫して「妙有り」に至る道程が難問である。この道程に関して弘前市立図書館の所蔵する『宝蔵院録』(寛永九年(一六三二)九月、今村嘉雄)に次の一節がある。

知格者、徒知而不叶術変、守格者、不至事一理一貫。離格而合格、是可謂得按前之妙也。

右の「格」とは、柳生但馬守宗矩の『兵法家伝書』(寛永九年(一六三二)九月、今村嘉雄)の「殺人刀」に出てくる『大学』の「致知格物」の「格」と思われるが、「事理一貫」にして更に「格を離れて格に合う」ことを「按前の妙」に至る道程としている。

また、宝蔵院流と関係の深かった「新当流手継の序次第」に、道程に関して次の一節がある。文中の「奇特」を「妙」になぞって考えてみたい。

兵法は

万死一生の兵術なり。但し奇特は鍛錬に在り。所謂百度の稽古を鍛と曰い、千度の稽古を錬と曰う。唯、鍛錬稽古に依つて奇特の神変を顕すなり。(今村嘉雄『日本武道大系』第三卷「一」二頁既出)

右の例を参考に「按前に妙有り」の文意は次のようにまとめることができよう。すなわち、不動・愛染などの神仏への帰依信仰を否定するわけではないが、百千の鍛錬稽古を重ねることなしに、悟りか迷いかなどへの「こだわり」を戒しめ、かつ、万死一生の鍛錬稽古の暁にこそおのずから「妙」に至るものである。

「妙」とは「はかり知れない程奥深く、精美至善の極致」の意である。

(5) 間去テ船橋ヲ勘哉(問去りて船橋を勘ふる哉)この「間」が難しい。ここで再び前記「宝蔵院流手継書」の次の一節を参考とし、「間」を「剣」と置きかえて注釈したいと思う。

有懸待・表裏二種之根源。懸有侍、待有懸。待耳守則盡剣去、刻舷、追兎守株類乎。

(懸待・表裏二種之根源有り。懸に待有り、待に懸有り。待のみ守れば則ち盡し剣去りて、舷を刻み、兎を追ひて株を守る類ひか。)(今村嘉雄『日本武道大系』第七巻)既出「一七二一九頁」

すなわち、右の「剣去りて舷を刻み」を参考として「間」を「剣」に置きかえてみたいのである。ところで「剣去りて舷を刻み」とは如何なる意味なのか。先ずこの語句を理解しておく必要がある。ここでは『新版禅学大辞典』（大徳編、一九八〇版）の「剣去久矣」と「刻舟人」の解説を参考としたい。

「剣去久矣」の「剣去る」とは、『呂氏春秋』（秦の相、呂不韋）の撰による書物の、進んでいる舟から剣を水中に落し、ここに沈んだと舟に刻みをつけたという故事から、求めるものが過ぎ去ってしまったのに、なお頑迷に旧を守るのをいましめる意とし、徒らに言句を尋ねても得られないことを譬えた言葉——としている。

また「刻舟人」もほぼ同じような意味で「舟から剣を水中に落し、その剣を探すのに、舷に刻んだ刀のあとを目じるしとして、舟の移るのを知らぬこと。転じて愚人が頑固に旧を守り、自由自在の活作略のないこと」と解説している。

右のように「間去りて」の語句は、「徒らに言句を尋ねても」却って「自由自在の活作略」を失い、求めることが得られないという譬えの言葉である。

次に「船橋」であるが、これは「船を並べ、その上に板を渡して橋に代えたもの」の意である。それでは「船橋を勘ふる」とは何かというと、右の「剣去久矣」「刻舟人」から推しはかつて、「剣」を水中に落した位置を知るにその位置を船の舷に刻むという代りに、船と船をつなぎ渡している板の数に譬えたものと考えることができよう。「剣去久矣」「刻舟人」とほぼ同じ意味に理解してよいのではないかと思われる。

以上のように、最初の「間」を「剣」に置きかえることによって、凡その文意も通ると思われる。すなわち、注(1)の「迷而行之則」以下の文言を受けながら「どうして迷いとか悟りとかの言句にこだわりとらわれて自由活達をそぐのであらうか」ということになる。

ただし「間」について別な解釈もある。弘前市立図書館所蔵の『宝蔵院流鏑之書』（著者、成立年不詳、筆記本、記号W、七六九三）（の「宝蔵院許可傳」の項で、本資料3に出てくる「何間去而鼓柁哉」の「間去而」について、次のように解説している。

古し舟の上にて腰なる帯刀の水中に陥たるに、あれへといふて手を打し間に、刀水へ入しを傍輩の旁より進み寄て四五寸水上に見えしを執上しと也。此執上し人ハ声も懸す手も打ぬ也。間ハ常の修行にあり。

右は舟から帯刀を水中に落し、水没寸前のその刀を取り上げたという、「あつ」という間の出来事を述べている。これは「間髪を容れず」、思わぬ事件に対応する兵法の心技を示す言葉といつてよい。従ってここでの「間」とは「瞬間」の「間」

の意味であって、必ずしも「剣」とは結びつかない。このような解釈もできないことはないが、「帯刀を水中に陥す」という表現から、この著者は「剣去而」の譬えを充分意識していたと思われる。それで、いまは「間」を「剣」に置きかえて注釈とする。

(6) ロロ足不有理 不明の二文字は、資料3から「待」と「具」であり、「待具足不有理」(待の具足に理有らず)と読むことができる。

「待」は「懸・待」の「待」である。兵法における「懸待一如」の重要性については、前記「宝蔵院流手継書」の一節「懸に待有り、待に懸有り。待のみ守れば則ち盡し剣去りて骸に刻み、兎を追ひて株を守る類ひか」という説明で充分と思われる。また「待のみ守れば云々」の文言は「待の具足に理有らず」の理由の一端を述べている。

ただし「宝蔵院流手継書」は、注(1)で記したように慶長二十年(一六一五)の伝書であるが、実はこの伝書の十年前に、右のような文言を使用している伝書がすでに存在している。その伝書は、慶長十年(一六〇五)二月吉日の年記のある「新当流手継の序次第一」(注(4)参照)という伝書である。この「新当流」は、飯篠伊賀守家直(長威人・長威斎とも)を祖とする神道流(剣)の流れを汲む流派であるが、伝書にみられる文言の類似性から「宝蔵院流」は「神道流」の影響を受けていると推察することができる。その文言を左に挙げておく。

夫上古流、中古念流、雖窮^二何皆待具足^一、无勇、如^三豈一毫大虚^二。

(夫れ上古の流、中古の念流、何れも皆待具足を窮むと雖ども、無勇にして一毫大虚を豈るが如し。)

雖然彼両流待具足而、无勇、似去劍刻^一骸、逃^二墓守株^三无活法^一。

(然りと雖ども彼の両流は待の具足にして、勇無くして、剣を去りて骸を刻み、墓を逃れて株を守るに似て活法無し。)

宝蔵院流の祖胤栄は飯篠伊賀守家直より「神道流」を学んでいるが、その分派である新当流印可状(『新当流手継の序次第一』)から右の文言を宝蔵院胤栄の高弟・中村市右衛門直政が採り入れたのではないかとさえ思われる。また、この流れに着目して自らの「許状」に右の文書の一部を採り入れた津輕弘前藩宝蔵院流十文字鎌の初祖高田平右衛門正重も識見に富む相当な人物と思われる。

さて「待の具足に理有らず」の文意であるが、これは「待の具足をいかに極めても、懸待一如の域に達しなければ心技と

もに充全ではない」ということになろう。「具足」とは、もともと「太刀・長刀・槍」などのあらゆる武器、武具（防具も含めて）の意であるが、ここでは広く武芸全般の心技を指していると思われる。

また、「待具足」を重んじた「上古の流」「中古の念流」等に対する批判の意味が含まれ、「間去而云々」の文言を引き継ぐことになっているのかも知れない。

- (7) 一心 究極の根底としての心。万有の実体、真如をいう。一とは平素絶対の意。心は堅実性を表わす。（中村元「傳教語」
大辞典）
(8) 死定逢口 資料(3)に「死定勿逢退」とあり、不明の文字は「退」である。読み方については、弘前市立図書館所蔵『宝蔵院流鑑之書』（既出）の「宝蔵院許口傳」に「死定而勿逢而退」とあり、その内容を吟味すれば「死定まりて逢いて退く」となかれとなる。

また文意については、死を軽んずるのは「山賊夜盜」のなすところで「死を守るハ当流の習也」とし、「死の守りの修行上達して」はじめて「死定まるの位」に至るとしている。そして「死定まるの位」に至れば、即ちその死に逢いて退くことなど少しも必要がないわけで、これが「当流根元の處也」としている。

- (9) 聖人法秘非秘為傳 「聖人は法を秘す。秘するにあらず、傳えんが為なり」

右のことに關し、寛永九年（一六三二）九月、柳生宗矩（新陰流）がまとめた『兵法家傳書』に「道は秘するにあらず、秘するはしらせんが為也」（今村義雄『日本武道大系第一巻』）とあり、この文言が芸道の秘事伝授の大事を示すものとしてよく引用される。しかし注(1)の慶長二十年（一六一五）の『宝蔵院流手繼書』に、すでに「能く之を伝え、能く之を秘すべし」と述べている。おそらく本資料のこの文言は『宝蔵院流手繼書』を意識して書いたものと思われる。

「聖人」とは、ここでは「唯授一人」の流儀継承者を指し、法とは人倫・道の意味もあるが、前記「宝蔵院許口傳」によれば「飛乱」より「許」までの「切組」と「秘歌の巻」までの目録を指しているという。

文意は、「唯授一人の流儀継承者は、みだりに人に教えることはしない。伝えるに足る人物にのみ教えるものである。それは祖師の流儀建立以来の純粋性を正しく保ち、後世まで脈々と伝えるためである」ということになろう。

- (10) 羅鳥を捕獲する網のこと。「一目の羅は鳥を得ることあたわず。鳥を得る羅は是れ一目なり」と読む。

「一目だけの網では鳥を捕獲できない。どうしても広い網が必要である。しかしここでいう網は、術技と理法全体を意味し、『宝蔵院許口傳』によれば「飛乱、虎乱、打留、五箇、三箇」までの「切組」全体の網としている。すなわち、ひとつの術技だけでは勝つことあたわず、術技の全体を習得しなければならぬということである。しかし実際の勝負の場面においては、あらゆる術技を駆使しながら最後に決するのはひとつの術技であるということである。

(11) 獅子忿嗔 「獅子奮迅」のこと。詳しくは禪語の「獅子奮迅三昧」のことと思われる。すなわち、これは「仏の威猛の喩え。仏がこの三昧に入ると大悲の身を奮い、応機の威を現じ、微細な惑障を断じ尽し、方便摂化し、外道二乗の小獣を畏伏すること獅子の奮迅する如くであるからという。」(『新撰神学大辞典』参照)ここでは、全心全霊を奮って修行に傾倒することの意と思われる。

(12) 前三後一 意味はつかみ難いが『碧巖録』の「第三十五則・文殊前三三」に「前三三後三三」の語句があり、この語句の意味と関係があると思われる。それでまず『碧巖録』のこの語句について述べ、次いで「前三後一」の意味に触れてみたい。

「文殊前三三」の文の中に、無着文喜という禅師があるとき五台山に遊ぶ夢をみるが、その夢の中で文殊菩薩に会って次のような問答をする。「殊云。凡聖同居、龍蛇混雜。着云。多少衆。殊云。前三三後三三。」(文殊いわく、凡聖同居、龍蛇混雜——悟ったものも迷っているものもいるよ。まあ正邪・深淺、世はさまざまといったところかな。多少衆ぞ——修行者はどのくらいおりますか。前三三後三三——あちらに三人、こちらに三人ぐらいだろうよ。)ところが無着文喜禅師は文殊の答えた「前三三後三三」の真意がわからなかった。以上が問答の一場面である。

右の場面について大森曹玄は「凡聖同居、龍蛇混雜して、あちらに三つ、こちらに四つところがっていると申しますが、觀じ来れば龍蛇一如、凡聖一致、みなそれぞれ千差万別の姿のままで仏法を莊嚴し、禪を現じている——とでもいうのでしょいか」と提唱している。(大森曹玄『碧巖録上巻』、柏樹社、二六八—二七二頁参照、一九八八)

「前三三後三三」については、右の大森曹玄の提唱で少しはわかるような気がするが、これと「前三後一」とでは数量上の表現も違ふし、これをどのように結びつけたらよいのかわからない。これについては、『碧巖録』の同じ「前三三後三三」に対する次の見解を参考としたい。

これは「常識的な数量の概念にまだわされない絶対的な無量無辺の世界を示したもの」(飯田利行編著『禅林名詞辞典』、国書刊行会、四六頁参照、一九八八)である。

それにしても「前三後一」の「後一」が気にかかる数字である。飯田利行の見解のように、例えば「後三三前三三」と同じ意味に捉えてよいのか、いまひとつ釈然としない。「後一」とするにはそれだけの意味があったと思われる。

恐らく、これは「唯一人」の意味ではないかと思う。そうするとこの文章は、注仰の「獅子忿嗔」の注と合せて「全心全霊を奮って修行に傾倒する武芸者の姿は千差万別であるにしても、最後に登りつめるものは唯一人ぞ」ということになると思われる。ここには、修行者に対する強い烈しい励ましの意味がこめられている。

解説

1、宝蔵院流(十文字鎌)について。これは宝蔵院覚禅房法印胤栄を流祖とする十文字鎌の流儀である。胤栄は奈良の興福寺の寺中(支房)、宝蔵院の院主であった。中御門氏の出で、代々興福寺の衆徒(僧兵)の家柄という僧でありながら刀槍の術を好み、兵法(刀術)は柳生但馬守宗厳と共に上泉伊勢守信綱に、槍法は成田大膳大夫盛忠に学んだと伝わる。柳生宗厳、穴沢盛秀、五坪兵庫らの助力を受けて、表九本、真位六本、合せて十五本の式目を制定して宝蔵院流を起した。鎌槍は胤栄の工夫とされ、本人は自ら流名を唱えることをしなかったが、後に鎌宝蔵院流とも称された。

また、大栗春見という人から香取の飯篠系(いいたけ)の新当流刀術を学んでいる。新当流との関係の深さは、注④、注⑥で示したように印可状等の文言によく現われている。

覚禅房法印胤栄は、慶長十二年(一六〇七)八月二十六日没、八十七歳であった。

胤栄没後、僧は武芸に励むべきでないという遺志によって宝蔵院流は廃絶しかけたが、胤栄を追慕する宝蔵院禅栄房胤舜は継承の志を立て、胤栄の旧門人その他の後援によって流儀を再興した。以後この道統は宝蔵院の歴代住職によって受け継がれ、流儀の家元として権威を保ち幕末に及んでいる。

一方胤栄以下歴代の門人にも勝れた人材が多い。直接の門人としては中村市右衛門直政、松崎助右衛門統字、山本藤蔵家次、尾崎左近大夫、金春七郎氏勝等がいる。津軽弘前藩の宝蔵院流の祖となった高田平右衛門正重は、右に挙げた門人とはほぼ同時代人と思われるが、胤栄の直接の門人であったかどうかについては特定できない。

(「本朝武芸小伝」『新編武術叢書』所収、九四頁。『武芸流派大事典』六四三頁。『図説日本武道辞典』六二六頁。『日本武道大系第七巻』二〇一頁等参照)

2、本資料の1は、津軽弘前藩における宝蔵院十文字鎧の初祖・高田平右衛門正重が慶安四年（一六五一）二月九日、唐牛兵九郎に授与した伝書である。同流に関し、寺山家が所蔵する資料として最も古い。高田平右衛門正重の伝書はこの一点のみであり、弘前市立図書館にも所蔵されていないところから、貴重といわなければならない。

3、高田平右衛門正重について。不詳な点が多いが、次の記録から関係部分を参考として概説しておく。

① 『高照宮御遺鑑・卷第二十三』（筆記本、弘前市立図書館所蔵。渡部¹⁶ 利容により延享元年（一七四四）成立）

青森県文化財
保護協会編

みちのく叢書『津軽藩旧記伝類』（国書刊行会、一九八二）所収の「渡辺利容筆記」の関係部分

（四二四頁）は右からの引用である。

② 『奥富士物語・卷二』（藤原通磨編、明和二年（一七六五）成立）（新編青森県叢書
刊行委員会編）『新編青森県叢書』所収、歴史

図書社、一九七三）

(1) 高田平右衛門正重は、越後国高田の出身、津軽で浪人中、浪岡村五本松（青森県南津軽郡浪岡町）に住し、槍術を指南していたところを弘前第四代藩主津軽信政に召し抱えられたといわれる。（このことは『弘前市史・藩政編』四六四頁にも記録されている）ただしその時期は明らかでない。『奥富士物語・卷二』に明暦年中（一六五五——一六五七）とあるが、この時期は信政が形の上では封を継いでいるが、信政幼少のため津軽十郎左衛門信英（黒石藩主）が後見の時である。江戸在住の信政が就封後始めて弘前に着任したのは寛文元年（一六六一）六月、十七歳の時であった。信政の事実上の治政はこの時以後とみてよい。このようなことから、高田平右衛門が明暦年中信政に召し抱えられたとは断定し難い。

このように召し抱えられた時期が不明であるにしても、高田平右衛門はすでに浪岡村五本松で槍術（宝蔵院

流)を指南し、本資料のように慶安四年(一六五二)二月、門弟唐牛兵九郎に伝書を授与していたことは事実である。このような実績があったからこそやがて藩主の耳にも達し、召し抱えられるようになったのであろう。ただし、慶安四年は弘前第三代藩主津軽信義の治政の時である。

また、前記『奥富士物語・巻二』では「采地二百石」で採用とあるが、その役職とともに不詳である。

(2) 宝蔵院流寛禅房法印胤栄の直弟子七人のうちの一人という。しかし『本朝武芸小伝』の「宝蔵院胤栄」の項では「中村市右衛門尚政、独り其の宗を得たり」とし、七人の弟子の名を特別に挙げているわけではない。中村市右衛門の高弟に、後に宝蔵院流高田派を開いた高田又兵衛吉次がいるが、この人物とは異なる。高田平右衛門が槍術の達人であったことが確かとしても、全国的水準の武芸書に載る著名人であったかどうかについては不明である。

ただし、『高照宮御遺鑑・卷第二十三』に

「鑑ハ十文字の名人宝蔵院流の直弟子、日本に七人の名有^(なある)高田平右衛門、此七人の儀に世人あまねく可知なり。其流儀の印可ニ付宝蔵院申置所、為後世名人帳に乗せたる証有て俗説にあらず」

とその真实性を主張している。

確かに本資料の印可状ともいふべき伝書の形式は古く、注(1)に記したように「宝蔵院流手継書」の書き出しに「不動・愛染」の二明王をもつてくる形式を、(今村嘉雄は他の宝蔵院流諸派に類例がないという)高田平右衛門は自分の伝書に採用している。これは「宝蔵院流手継書」を意識して「不動・愛染」の語句を敢えて採用したか、あるいは、若しかしたら「不動・愛染」の語句の入った印可状を自分が授与されていて、それを参考にしたのかも知れない。

しかし何れにしても資料不足で想像の域を出ない。

- (3) 高田平右衛門の嫡子は高田儀兵衛正茂であり、次男が甚六郎正利である。この点『奥富士物語・巻二』の「嫡子は甚六正利」とする記述は誤りである。ちなみに、一戸三之助宗明が延享四年（一七四七）岩渕千治郎に授与した「免状」の伝系は次の通りである。

奈良住元祖宝藏院直傳

高田平右衛門正重

高田 儀兵衛正茂

山中亦右衛門成美（後に松庭家の養子となり
松庭又右衛門と名乗る）

浅利伊兵衛尉均祿

高田 甚六郎正利

高一 三之助宗明（一戸三之助のこと）

また、高田儀兵衛は寛文九年（一六六九）の頃当流を代表してすでに活躍していた。同年の十月十八日には藩内の他の武芸者とともに、第四代藩主津軽信政の前で演武したことが、『弘前藩庁日記』に次のように記録されている。

十月十八日（『青森県史』六二九頁に
「十月十七日」とあるのは誤り。）

一、常井喜兵衛、木立忠左衛門、蒔苗清之丞、福士弥左衛門、右(管)くた(棒)鑓仕合共ニ。當田半兵衛、牧嘉津左衛門、須藤嘉津右衛門、右太刀・くた(管)鑓・ほう。高田儀兵衛、且野序右衛門、奈良三郎兵衛、櫻庭市右衛門、高杉権兵衛、打越源五郎、右十文字表仕合共ニ。圓山市兵衛、右ほうろく火矢、おき火筒、火弓火矢。

右之通於内馬場夕御膳過御覽被遊候。

4、「夫兵法者不動明王愛染按前妙有。何(明上)ソ間去テ船橋ヲ勘哉。待具足不有理。一心闇而無得理。死定逢退。師親之傳仍之疑有哉。」(夫れ兵法は不動明王愛染の按前に妙有り。何(明上)ぞ間去(明)つて船橋を勘ふるかな。待の具足は理あらず。一心闇うして理を得ることなし。死定まりて逢いて退くことなかれ。師親の伝、之により疑い有らんか) 文意

兵法は不動明王・愛染明王への深い信仰によって奥儀に達することがあるにしても、その信仰よりも百千鍛錬の修行が先決である。厳しい修行の暁にこそ精妙極致の心技に至るものだ。その鍛錬を不充分にして神仏を信仰し、迷いとか悟りとかの言句にこだわり、心技の自由活達を少しでも欠いてはならない。

かつての主流であった「待」の術技は、これをいかに極めても理(利)はなく、本流儀の「懸待一致」にこそ心技の極致がある。しかし一心が闇く曇っているのは「懸待一如」の境地は極め難い。

もともとわが流儀は、死を軽んずることなく、むしろ死を守ることを大事にしている。従って死の守りの修行上達してはじめて「死定まるの位」に至るとしている。この「死定まるの位」に至れば、死に逢って退くことなど少しも必要がないのだ。

これらがわが流儀建立以来の師伝であり、疑うようなことがあってはならない。

5、道歌三首について。

(1) 鳴子をば己れが羽風に引きたてて、心とさわぐ村雀(むらすずの)かな。(群れをなして飛びまわる雀は、自分たちの羽風で鳴子を鳴らし、その鳴子の音に驚いて心を乱すものだ。心の乱れは、自分自身の心の奥底に原因があることを忘れてはならない。)

(2) 染め出だす人はなけれど春来くれば、柳は緑、花は紅。(これから緑になりますよとか、花が咲きますよとか力まなくても、とき至れば樹木は緑をつけ、花は咲くものだ。鍛錬を重ねていけば、心技はおのずから満ちてくる。心技満ちて平常心平常心。)

(3) 白露は己が姿のなきままに、紅葉に置きし紅の玉。(白露には、これといった自分の色や姿はないけれども、紅葉の上の白露は、くっきりと紅葉の紅をうつしている。相手が技を発せんとする気を瞬時にしてわが心にうつしとらえるには、わが心は白露の如く、常に澄み切っていなければならない。邪惑、怖、慢など少しでもあつてはならない。わが心無心にしてはじめて相手の気をうつしとることができる。)

6、聖人法秘、非秘為傳。(聖人は法を秘す。秘するにあらず、伝えんがためなり。)その流儀の頂点にある人は、みだりに他人に教えるようなことはしない。それはただ秘するために教えないのではなく、流儀を継ぐに足る人物にのみ伝授するということだ。これは正しく流儀の伝系を守り、後世まで伝えるためである。

7、一目羅不能得鳥、得鳥羅者是一目。獅子忿嗔之旨、前三後一。(一目の羅は鳥を得ることあたわず、鳥を得る羅は是れ一目なり。獅子忿嗔の旨、前三後一。)

一目だけの網ではとても鳥をとらえることはできない。しかし、いかに網目の多い大きな網でも、実際に鳥の

かかるのはその網目のひとつだけに過ぎない。この網目のひとつが大事である。全身心を奮って修行に傾倒することによって、ぬきんでて網目のひとつとなり、流儀の精妙を極めることが大事ということだ。願わくば「唯授一人」の一人たるべく精進して欲しい。

8、右此一巻御執心之旨、令相傳早。聊他見有間敷者也。

(右此の一巻御執心の旨、相伝せしめ^{（おわ）}早んぬ。聊かも他見有るまじきもの也。)

2、寶藏院十文字鍵許卷 一

卷子本

寶藏院流名目録 (印判) 写真本

一、飛 乱 太刀合 三

一、虎 乱 長刀合 三

一、打 留 鑓 合 三

一、五 箇 口 傳

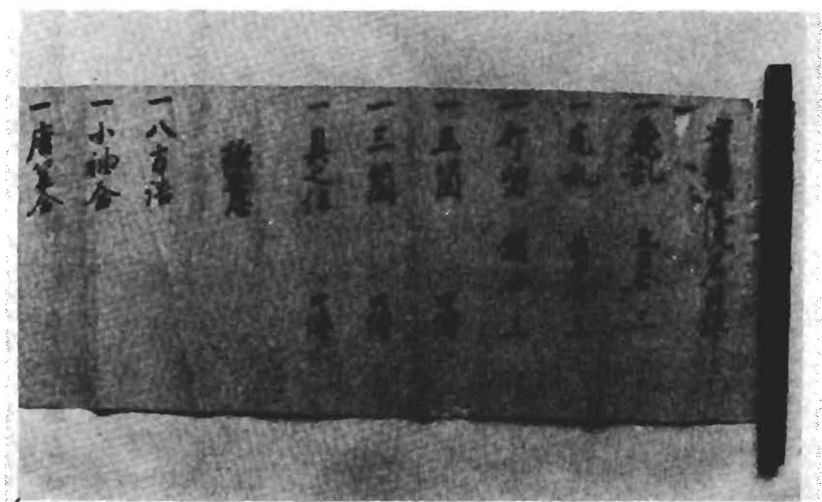
一、三 箇 口 傳

一、真之位 口 傳

極意 (印判)

一、八方詰

- 一、小袖合
- 一、唐笠合
- 一、戸入
- 一、風車
- 一、下道具合
- 一、梯之曲尺
- 一、妻手切三寸替
- 一、浦之波
- 一、龍之打込
- 一、滝落
- 一、茂
- 一、逆手鎌
- 一、五月雨
- 一、早馬
- 一、紅
- 一、思返
- 一、前廣
- 一、芝搦



写真(8) 『寶藏院十文字鑑許卷一』「寶藏院流名目録」の書き出しの部分。
寶藏院の「藏」及び「極意」の文字の上に「印判」がある。

一、船軍

一、狭間之鎌

写真⁽⁹⁾

右此一巻雖為秘處御執心之

間令相傳早他見有

間鋪者也

(一六七六)

延寶四辰

九月十五日

高田儀兵衛尉⁽¹⁾

正茂(朱印・花押)

浅利伊兵衛殿

注(1) 高田儀兵衛正茂一四八頁の解説(3)を参照されたい。

3、寶藏院十文字鍵許卷 二

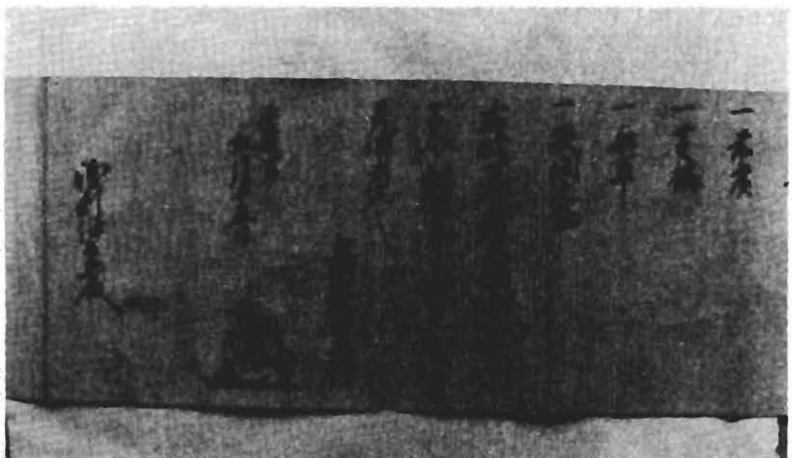
卷子本

寶藏院歌之書

(印判)

写真⁽¹⁰⁾

夫兵法者不動明王



写真(9) 「寶藏院流名目錄」の奥書きの部分。

愛染按前有妙何

間去鼓柅哉待具足⁽¹⁾

不有利⁽²⁾一心闇而無

得利死定勿逢退⁽³⁾

師親之傳何疑之

有哉⁽⁴⁾

なるこを^(鳴子)はおのか羽風^(上)

にひきたてゝ^(引き)ころ^(心)

とさわくむらすゝめかな^(騒)

そめ出す日とはなけれと^(染)

春くれハやなきは緑^(柳)

はな^(花)はくれ^(紅)ない

白露^(上)ハおのかすかたを^(姿)

そのまゝに^(紅染)もみぢに^(置)をけは

くれ^(紅)なゐのたま^(上)

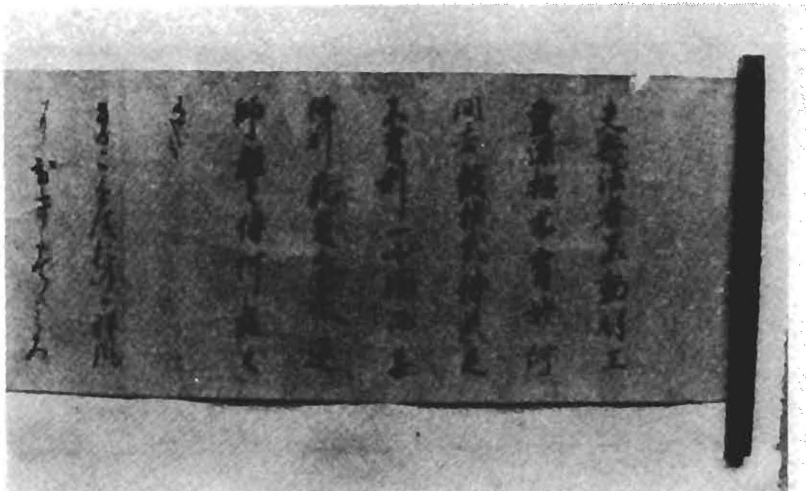


写真00 『寶藏院十文字鍵許卷二』『寶藏院歌之書』の書き出しの部分。

聖人法秘

非秘為傳

一目羅(あみ)不能得鳥

得鳥羅者是一目

獅子忿嗔之旨

前三後一

右此一卷御執心之旨

令相傳訖聊他見

有間鋪者也

高田儀兵衛尉

延寶(一六七七)五乙

七月吉日

正茂(朱印・花押)

浅利伊兵衛殿

注(1) 何間去鼓十哉 「何ぞ間去りて鼓柁かな」 「鼓柁」は「楫を動かす。船をこぐ。」こと。資料1の「何ソ間去テ船橋ヲ勘

哉」と用語は異なるが、右の注(5)とはほぼ同様の意味と思われる。

(2) 利 資料1では「待具足不有理。一心闇而無得理」と何れも「理」であった。「理」は「理法」に通じるのに対し、「利」は勝負における「有利性」を強調した表現と思われる。

(3) 死定勿逢退 「死定まりて逢いて退くことなかれ。資料1では「死定逢退」と表現していたが「勿」を加えて意味を明らかにしたと思われる。

(4) 何疑之有哉 資料1は「仍之疑有哉」とあり、何れもかなり無理な表現と思われる。

4、「寶藏院十文字鍵許卷 三」

卷子本

写真(11)

寶藏院流十文字鎌

數年依御執心不淺

先師相傳之位心持不殘

令傳授訖自今以後執心之

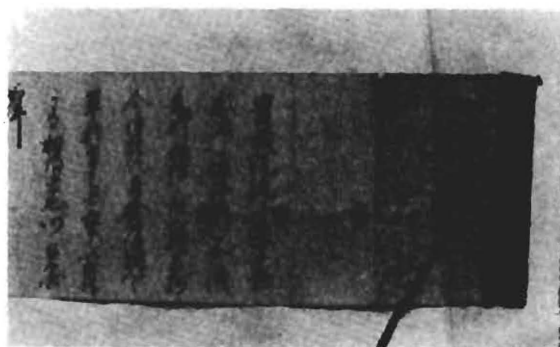
輩於有之者重々以起請

可有相傳者也依免狀

如件

天和二年戊
(一六八二)

高田儀兵衛尉



写真(11) 『寶藏院十文字鍵許卷三』の「免狀」の書き出しの部分。

八月十五日

写真
正茂（朱印・花押）

浅利伊兵衛殿

解説

1、「寶藏院流十文字鎌、數年御執心浅からずにより、先師相傳の位、心持ち、残らず傳授せしめ訖んぬ。自今以後執心の輩これあるに於いては、重々起請を以って相傳有るべきもの也。依（ゆる）し（よう）く（だん）って免状（おわ）件の如し。」

2、津輕弘前藩の寶藏院流十文字鎌の伝書は、資料2の「寶藏院十文字鎌許卷 一」（寶藏院流名目録）、資料3の「寶藏院十文字鎌許卷 二」（寶藏院歌之書）、資料4の「寶藏院十文字鎌許卷 三」（免状）の三巻が主であり、この三巻が以後の同流儀伝書の典型となっている。

3、浅利伊兵衛均禄の場合、津輕弘前藩の初祖・高田平右衛門正重よりの伝書はなく、平右衛門正重の嫡男・高田儀兵衛正茂から受けた伝書である。儀兵衛正茂からは延宝四年（一六七六）より天和二年（一六八二）までの七年間指導を受けた。伊兵衛均禄が二十歳から二六歳までの頃である。武芸鍛錬に精進していた年代で、ちなみに延宝三年（一六七五）七月に當田甚五兵衛から「當田流太刀」の許状を受け、延宝八年（一六八〇）年九月には「唯授一人」として道統を継いでいる。同時に「當田流棒」の印可も受けている。

5、「寶藏院流紅之書」

卷子本

1 「寶藏院」の「藏」の上に印文「寶」の「印判」がある。

寶藏院流紅之書
(印判) 写真(4) 写真(5)

飛乱太刀合 三

一、敵より太刀かすみの時 十文字遠山の中
段に持かゝり候時 太刀より足を切出し候
處を上よりつきこみ勝
(突込)

一、敵太刀を陰に持候時 十文字下段にもち
かゝり候所を太刀より切出候 十文字足を
ふみ込中段に取 太刀引取候處をふみ
(突込)
こみついて勝

一、敵太刀しやの時 十文字上段太刀切出し候
時 足をふみ下段になをし引候所をその
まゝ勝
(車)
(直)

虎乱長刀合 三

一、敵長刀せつかうの時 十文字遠山の中
(折甲)

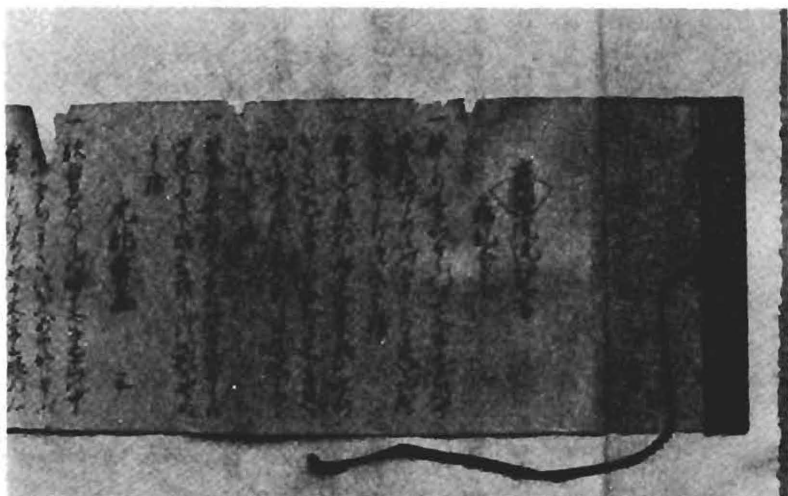


写真03 『寶藏院流紅之書』書き出しの部分。

段にもち わきつはへあてかゝり候時

長刀よりはり候時 十文字上段乃心

もちにはつし上よりつきこミ勝

一、同長刀瀧なかし(流)の時 十文字上段にもち

かゝり候時長刀より切懸候時 十文字足

をふミこミ中段になをし上もつき込勝

一、長刀しは返し(案)の時 十文字下段にもち

かけ候時長刀よりかぶり入候時 十文字上

にて合(あわせ) 足をふミこミふりきりすて そ

乃まゝ勝

打留鑑合 三

一、たかいに遠山(五)の中段に持かけて下段に

十文字おとし候時 すやりよりつき出し(直雄)

候時 十文字足を引かふり足をふミこミ

きりすて下をとめ候時 すやりよりつき

出し候所を十文字上にて打おとし 脇

つはへつきとめ勝

一、敵下段之時 十文字上段に持かゝり候時す

やりつき出し候時 下にて合 かふりこ

ミきりすて勝

一、同下段の時 十文字上段に持かゝり候

時 すやりつき出し候時 十文字足を

ふミ込上より打おとし そのまゝ勝

五箇 五本

一、敵脇中段の時 十文字上段に取かゝり候

時 すやりよりつき出し候時 十文字下

にて合 すやりよりうしろへ(後ろ)こし脇(越)

つはをつき候時 十文字足をふミこミ

かふり入上よりすりこミ勝

一、たかいに前ひろの時 すやりよりうしろへ(廣)

打こしつき候時 下にて合 うしろへ

つき出し候時 足をふミこみ上にてうち

おとし つきとめに脇つはへ勝

一、敵前ひろの時 十文字上段に持かゝり候

時 すやりより打こみ候時 十文字
より足をふみこみかぶり入 すり込
上より勝

上より勝

一、すやりこし中たんの時 十文字上

段に持かゝり候時 敵よりつき候時 下にて

合 上にて打おとし脇つはへつき留に勝

一、同上段乃時 十文字飛乱に持 つかくとし

かゝり打候時 十文字足をふみこみ かふ

り入すりこみうゑより勝

三ヶ

三本

一、たかに前廣の時 すやりつき出し候時

十文字より上にて打おとし其俣勝

一、たかに上たんの時 十文字少さかけて

よこ手をつけ掛かゝり候時 すやり

中たんにはつしつき出し候時 下にて

あわせ 上にてうちおとし勝

一、同前廣の時 十文字少すしかへ身の

かねを合かゝり候時 すやりよりつき
出し候時 下にて打おとし其まゝ勝

真之位 九本

一、敵太刀きやく身にかまへ候時 十文字

下段 但けんさきを太刀を持候こふし

にをしあてかゝり候時 太刀よりきり

かけ候時 足をふみ込 なを下段に落候

時 太刀をしやに直し引候時 脇つは

へかふりつきに勝

一、太刀はつさうの時 十文字下段 太刀

より切かけ候 十文字かふりつき

にそのまゝ勝

一、太刀とうほうの時十文字上段 けん

さを敵のひたいにおしあてかゝり候

時 太刀をはりかけ候時 脇ねほへ勝

長刀合

一、長刀たきなかしの時十文字上段に

かゝり候時 長刀よりはりかけ候時 十文字足をふミこミ中段にはつし候時 長刀ゝわきつほつき候時 上ゝ打おとし勝

一、長刀前ひろの時十文字下段に持候

時 長刀より足を引切落かふりこむ所を十文字うわ手ゝかふりつきに勝

一、長刀柴返しの時十文字腰中たん

にてなきなたをおさへる心もちにて上手よりたゝきをついてとるへし

鎧合

一、すやり下段の時十文字こし中段

にもちけんつもありあたらざる所にて

おとし候時 すやりゝつき出し候時 足を

ふミこみうしろにて合入こミ候時 すや

り前へはねこしつき候時 まへにてつき

とめに勝

一、すやりこし中たんの時十文字上段

に持かゝり候時 す鎧ゝつき出し候時 下

にて合候時 すやりうしろへはねこしつき候時 かふり入そのまゝ勝

一、す鎧より下段の時十文字わきとり

をすこしたかくもちかゝり候時 すやりよりつき出し候をくわつして 上よりおとしつきこミ勝

目付之次第

一、上段の鎧はけんさきを敵のひたいに

おしあて 上り下りなきやうに

一、中段の鎧ハ二とお有り 腰とをりに

持をこし中たんと云 かたとをりに

もつを中段と云

一、下段の鎧は敵のひさかしらの通ニ

けんさきをあて さかりなきやうに

もつを下たんと云

目付五つ之事

一、こくうの目付とはまミの間を云 但 か

おのけ乃事也

一、遠山の目付とは左右のかたを見る也 (付)

一、おりの目付とは左右のひちをいふ (折)

一、ほしの目付とは右のこふしをいふ (星) 但

敵の

一、はくんの目付と云ハけん (破軍) さきを云

一、遠近と云は鑓の打所の事 (初) けん

(先) さきより二尺五寸こして打也 (極)

極意 写真 15

一、八方詰 敵太刀大勢かゝる時 十文字

飛乱にかまへく (構) ひ足へちらしかけ (首)

入こむ所をついてとる 目付肝要也

一、小袖合 同太刀をもち野中のまくにて (敵)

かゝる時 十文字下段まく打かくる時

十文字中たんにはつし 其まゝつ

いてとるへし

一、唐かさ合 敵からかさ (笠) をひろけ太刀 (広)

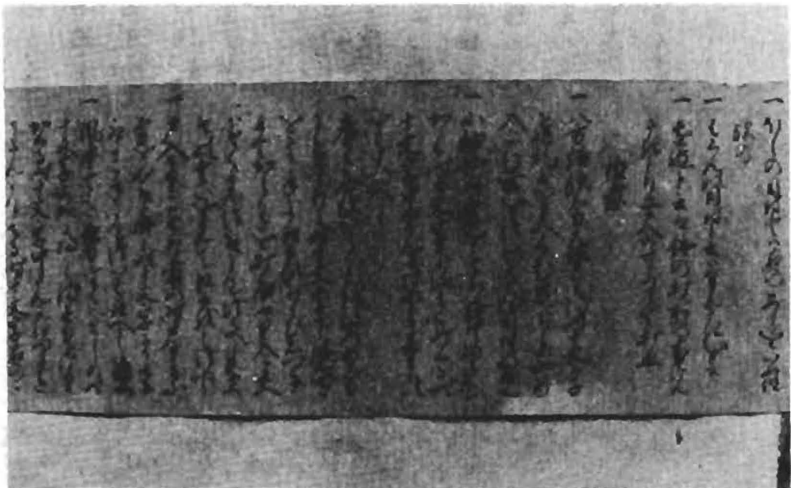


写真15 「極意」の部分。

にてかゝり候時 十文字下段 石つき(突)

にてからかさ(直)を打やふり入こミ候へ

は すぐ(体)に石つきにてつくへし さなくハ(直)

そのたいを見て取なをしつくへし

一、戸入 とりこもり者の時 戸わきに(取籠)

太刀をぬき居候時 十文字さか手に(逆)

取 よこ手(横)にてついで取へし 口傳多し

一、風車 てき長刀(龍流)たきなかしの時

十文字上段に持かゝる 長刀はり

かくる時十文字中たんにはつし また

下たんにてはる時 十文字右のこ

とくはつし 其いろ(色)を見てつ

いてとるへし

一、下道具合 すやり上段の時 十文字(すこし)
(下懸)

少したやりによこ手をつけ掛(かけ)

かゝり 左右におさへ勝 上より横手を

かくる心持有り

一、ふた／＼日遣 身(曲尺)のかねすやり下段(めづかい)

の時 十文字上段 すやりより脇

つほをつく時下にて合 又すやり(あわせ)

上へこしつく時 かふり入あつめにて(柄詰)

勝

一、妻子切三寸かわり すやり上段の時(替)

十文字も上段に持かゝり 中たんに

なおし打落勝 又打候時すやり

よりはつす所をとひちかい打おとし勝(飛込)

一、浦の浪 すやりわきとりの時 十文字(艇取)

遠山の中段にもちかゝり候時 す鎧

よりつき候時上にて打落勝

一、龍の打込 すやり遠山(中たんの)の時十文字

上段にもちかゝり わりひさにて(割膝)

十文字中段に直し打落て勝へし

一、瀧おとし すやり下段の時十文字

頭ふたかく中段に持かゝる時 敵より

つき出し候時上より打おとし はやく

ついて取へし

一、茂^(しげり) 竹やふ 柴かき通る時 十文字の

太刀打を右の手にて身にそへもち^(添持)

左にておしわけとをる^(通)へし

一、さか手^(逆)かま^(鎌) すやり中段の時 十文字

上段 さか手にもちかゝり候時すやり

よりつき出候時下にて合 但 敵

よりつよくこミ候時 さか手に持たる^(か)か

つよミなり

一、五月雨 すやり下段の時 十文字脇

とりにもちかゝる時 すやりよりつき

出スを上にて打おとし 又前へ廻し

つくとき前にて打おとし勝^(長柄) なかへ

のすやりに合たるときよし

一、はや馬^(早) すやり下段にも中たんにもち

もち候時 十文字上段にもち つき

出すを上^まおさへのり込勝 す鐘^ねを

目付には敵のこふし^(拳)を目付ル所肝要也

一、紅 敵何^(いかな)やうにやりもち候とても

その鐘に付合勝をもミちと云^(紅葉)

一、思返^(おもいかへし) すやり下段の時 十文字も下段

にもちかゝる時 すやり^まつき出すをあ

しを引かふり やり口^(縫)のあかざるやう

にす^(頭)の上よりすりこミ勝

一、前廣 たかいにまへひろの時 敵より

さきをこしつき候時 上にて打おとし

下にて合^(あわせ)そのまゝ勝 又十分字^ま

さきにて勝心もちあり

一、芝搦 すやり上段の時 十文字くわつして^(頭)

下段にかふり候時 すやり^まつき出し候

時 上にて打おとしはやく立てつくへし

上り坂下り坂によらす沓^(靴打)きうちの

時遣やりなり^(つかう)

一、舟軍 ふないくさの時 打違ル時横手^(敵)

にててきのふな^(船)はたゑ打かけ引よせ

ついてとるへし すくにつく事ゆめく^(直)

有へからす

一、狭間之鎌 石つきにてつき出すへし

但^(指) いの目に口傳有へし

一、沼蕨^(ぬまきわ)にてつきむすふ次第の事 はい^(指)

たてをゆんて^(指)のひさにしき 鎌を^(膝)

上段にもち合するものなり

一、坂にて上下の鎌合次第之支 上り坂の

時はひたりのひさを^(左)つき右の^(膝)

ひさをたて やりを中たんにもち

合するもの也 同下り坂の時は左の

ひさをたて右のひさをおり鎌あわ

せへし

一、しゆりけん^(手裏剣)とめの事 十文字ひらん^(飛丸)

にもちかゝる時 太刀よりしゆりけん

にうち候時くわつしてこふしを^(喉)と^(拳)

むる心もちかんやうなり^(肝要)

一、ふんのものつきやう心持 口傳

一、あつめうろこかたにて勝心持 口傳右

に有

一、三尺のつもり^(指) たかい相つきの時 上

鎌につくへし かならず三尺のひるも^(逆)

のなり

一、五尺のつもり 敵つき出し候時 一定

あとへ引 てきの鎌を引取候時上

よりふミ込つくへし

一、たて合の事 十文字よこ手にて

上より掛落シはやくついて取へし

一、十文字合 たかひにさきにた

ち 上下にておさへる心持肝要也

但 敵下鎌にてつけたる時上鎌

より引落シ勝心もちもあり

一、生捕のかま乃事 石つきのいのめへ

横手をいれる心もち 口傳有之候

一、やきり鉄炮留の事 取籠者の

時 十文字の糸に三所まくをかけ^(柄)

へし 但 中のまくはまわたにてす

へし まくのあい一尺はかりつゝ上段

にもち 右之まくにて身のかねを合
躰をかくしかゝるへし まわたのあ
つさ五分

口上極位

一、きりかま (切鎌) 敵たちをもち候時十文
字をもち かまを上へたて (腰) こし

中段にもち手をかため切かけ勝
をかんやうなり (肝要)

一、ゑ腰 (柄越) うしろつまり石つきつかされん
(後)

時 十文字をくりこミ石つきをそら
ゑなし下段にもちてきつき (敵)

候ハ前後にてあいかつ

一、馬上 (馬) 口傳

一、そけつさり (鼠穴) にてもひやいにても

腰のつまりたる時そけつに

かまへ腰

一、一之かま (鎌) 口傳



写真04 「寶藏院流紅之書」の終りの部分。

右此紅葉之書雖為秘書
御執心之旨令相傳畢聊
他見有間鋪者也

元禄十四^(一)
己^(二) 曆

櫻庭又右衛門尉

十一月吉日

成美(朱印・花押)

浅利伊兵衛殿

6、寶藏院十文字鎌印可状

卷子本

右の「袖」に「寶」の印文のある「印判」がある。



(印判)

夫十文字鎌之流他多⁽¹⁾
写真⁽¹⁷⁾

雖行我先師宝藏院者

教外別傳⁽¹⁾而絶比備者也

所以者何閱諸流之中⁽²⁾

夙夜工夫鍊磨⁽³⁾而別立

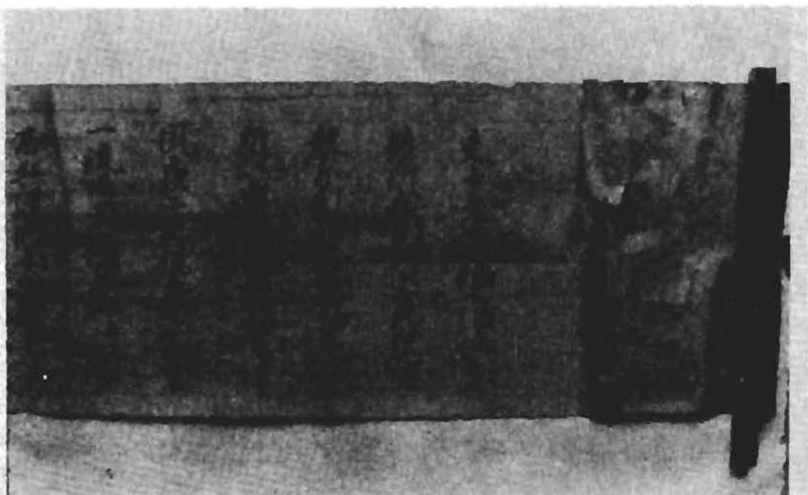


写真17 『寶藏院十文字鎌』『印可状』の書き出しの部分。

一流派天鑑無私⁽⁴⁾子幼少⁽⁵⁾⁽⁶⁾

志兵道師之不離左右勤⁽⁷⁾

学之者年久月久百鍊

黄金再入⁽⁸⁾炉納碑廟尋常⁽⁹⁾

再鍊終始會得則縱橫

自在也縱然八方置敵布

把捨頭倒刺人勢天魔外道⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

可拱手不可當其鋒⁽¹³⁾平而

公多年就⁽¹³⁾子習之敏應

深思⁽¹³⁾而其器用可謂英雄

豪傑⁽¹³⁾奇哉快哉⁽¹³⁾子

感之⁽¹³⁾合諸具足一物⁽¹⁴⁾

不殘令相傳畢縱他日

積千金非其輩聊猥不

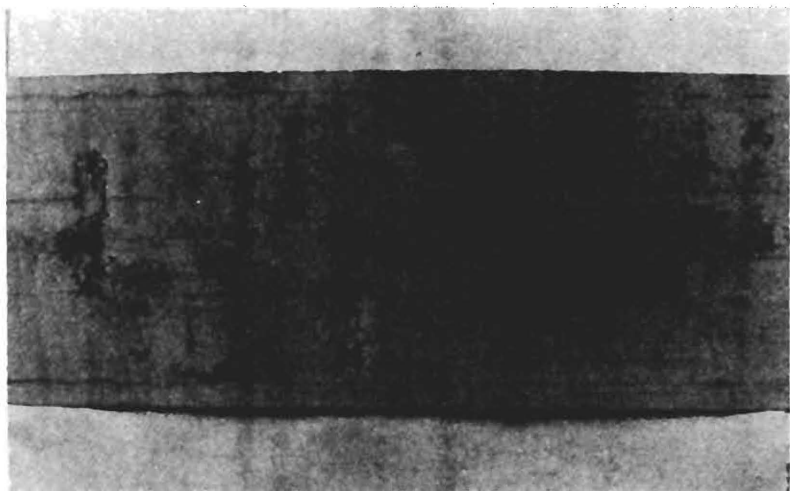
可傳誦者也可秘々々⁽¹⁵⁾

仍印可状如件



一、水車
一、鱗形
一、切鎌
一、體曲
一、柄返
一、悦眼
一、西風
一、柳雪
一、稻妻
一、水月
一、柄越
一、栄月
一、十二本搦
一、馬上
一、必勝
一、乱勝
一、単穴
一、一之鎌

以上



写真(8) 「印可状」の最後の部分。

(一七・四)
寶永元^甲 申 曆

櫻庭又右衛門

十二月十三日

成美^{写真印} (朱印・花押)

浅利伊兵衛殿

注

(1) 絶比 類なくすぐれていること。

頁の解説1に述べたように、先師宝蔵院寛禪房法印胤栄は兵法を柳生但馬守宗厳

(2) 聞諸流之中 (諸流の中を聞し) とともに上泉伊勢守信綱に学び、槍法は成田大膳大夫盛忠のもとで修行している。また大栗春見から飯篠系の新当流刀術も

学んだ。諸流とはこのような流儀を指していると思われる。

(3) 夙夜 朝早くから夜おそくまで。朝暮。

(4) 別立一流派 (別に一流派を立て) (2)の諸流を学びながらその流儀を継承することなく、それらの教えの中からさらに

一步工夫して宝蔵院流を立てたことを指す。これを「教外別傳」と称している。

(5) 天鑑無私 始めから諸流を学ぶことによって新流儀を立てようと思図していたのではなく、無心のうちに天から宝蔵院流

を授けられたという意味と思われる。

(6) 予 櫻庭又右衛門成美のこと。

(7) 師 高田平右衛門正重のこと。

(8) 百鍊黄金 百鍊の金の剛き意で、勇気の強さにたとえる。

(9) 入炉納碑廟 (炉に入れ碑廟に納む) 炉は火炉の略で、密教で護摩を修する時、壇に置いて護摩木をたく炉のこと。護

摩を修し祖先をまつる御霊屋に自分の心身を清めて納めること。

(10) 布把 布把のこと。布のはちまき。

(11) 捨頭 命を捨てること。

(12) 天魔外道 天魔と外道。ともに仏道をさまたげるものであるが、ここでは人の善事を妨げ、また災厄をもたらす恐しい悪

(13) 公 浅利伊兵衛均祿のこと。

解説

- (14) 合諸具足 (諸具足を合わせ) 十文字鎌をもって太刀・長刀・素槍・突棒など諸武器を使用する武術に勝つ技。
 (15) 誦し 宝蔵院流に関する伝統的な心技を説くこと。

1、夫れ十文字鎌の流は、他に多く行わると雖も、我が先師宝蔵院は教外別傳にして絶比備わるもの也。その所以のもの何ぞとなれば、諸流の中を閲し、夙夜工夫錬磨して別に一流派を立て天鑑無私なればなり。

予幼少より兵道に志し、師の左右を離れずしてこれを学び勤むるは年久しく月久し。百錬黄金再び炉に入れ碑廟に納め、尋常再錬終始會得し、則ち縦横自在也。縦然八方に敵を置き、布把、捨頭、刺人の勢いたる天魔外道も手を拱くべし。其の鋒に当るべからざるか。

而して公、多年予に就き之を習い敏應深思にして其の器用英雄豪傑といふべきか。奇なるかな快なるかな。

予之に感じ、諸具足を并合せ、一物も残さず相伝せしめ畢んぬ。縦い他日千金を積むといえども其の輩にあらず、聊かも猥りに誦し伝うべからず。秘すべし秘すべし。仍って印可状件の如し。

2、右の文意。

十文字鎌に関わる流派は他に多くあるが、津軽弘前藩の十文字鎌は、元祖である宝蔵院寛禪房法印が教外別傳として会得した流儀で比類なく卓越した流儀である。なぜなら、宝蔵院寛禪は刀法、槍法等の諸流兵法の特質を学んでこれを集大成し、その集大成した術技を日夜工夫鍛錬して、無心無欲のうちに、まさに月が満ちるようにおのずから新しく立てられた流儀であるからである。

自分(桜庭又右衛門成美のこと)は幼少から兵法の熟達を志し、師高田平右衛門正重に師事して多くの年月を

過した。この間、不動明王、愛染明王のもとに護摩を修すること数度、遂に邪念を脱し心身を清めることができた。やがて平常心に至ってさらに鍊磨を重ね、宝蔵院流の一切を会得し、心技ともに縦横自在の境に達した。たとい八方に敵をおき、それらが命がけで改め寄せる悪魔の如き強者であるにしても、手も出せないであろう。手を出したとしてもその武器は自分に触れることもできないに違いない。

それにしても貴公（浅利伊兵衛均禄）は数年自分について宝蔵院十字鎌を習鍊し、術技鋭敏で思慮も深く、その心技のはたらきはまさに英雄豪傑といつてよいであろう。まことに驚くべき熟達で痛快である。

自分は貴公のその心技備わった熟達を見極めたが故に、いかなる武器をもつ相手に対しても勝ち得る宝蔵院十字鎌の奥儀の一切をすべて相伝することにした。

今後師という立場になったとき、修行不十分な弟子が金銀を積んで相伝を請うことがあっても、それは伝えるに足る人物ではない。そのような人物には、いささかでも古来より伝わる宝蔵院十字鎌の奥儀を教えてはならない。むしろ秘すべきである。

以上をもって本流儀の印可状とする。

7、寶蔵院十文字鎌許卷 一

卷子本

先の部分を欠く。軸がなく巻き紙の様式。

寶蔵院流名目録

写真(20)

一、飛乱 太刀合 三

一、龍落	一、龍之打込	一、龍之	一、浦之波	一、妻手切三寸替	一、梯之曲尺	一、下道具合	一、風車	一、戸入	一、唐笠合	一、小袖合	一、八方詰	極意	一、真之位	一、三箇	一、五箇	一、打留	一、虎乱
													口傳	口傳	口傳	鍵合 三	長刀合 三



写真20 「宝蔵院流名目録」の書き出しの部分。

一、茂

一、逆手鎌

一、五月雨

一、早馬

一、紅

一、思返

一、前廣

一、芝搦

一、船軍

一、狭間之鎌

右此一卷雖為秘所御執心之

間令相傳了聊他見有間數

者也

浅利伊兵衛

年号月日書判朱印 但

是ハ歌之書 一年も半年も

月日はやくすへし 弟子成

月日ニしてもよし 二巻ともニ
(しあわせ)
仕合ニ入候て出すへし

樋口弥三郎殿

8、寶藏院十文字 鍵許巻 二

卷子本

破損極めて大きく前半を欠いている。
残った部分を左に記す。

写真(21)

聖人□□
(法秘)

非秘□□
(為傳)

一目羅不能得鳥

得鳥羅是一目

獅子忿嗔□□
(之)

前三後一

右此一巻雖為秘所御執心
之間令相傳了聊他見有間



写真(21) 『寶藏院十文字鍵』『歌之書』であるが、破損が大きく前の部分を欠いている。

敷者也

浅利伊兵衛尉

年号月日書判朱印すへし

但是ハ□□□□も一年も半年も

月□□あと□□□□ 仕合ニ入

□巻の同□出し候月日よし

樋口弥三郎殿

9、寶藏院流紅之書

卷子本

1. 先の部分が破損し「五箇」の後半より判読できる。

2. 軸がなく巻き紙の様式である。また反故の料紙を用い、裏に二・三の落書がある。

3. 長文であるので句読点をつけた。

一、三。^{写真22} 敵のすやり前廣にかまへ候時、十文字上段に
(直達二まへひろ) (構)
(ち) 持かゝり候をすやりより打込つき出し候其時、十
(直達) (み) (美)
(足) 文字あしをふみ込かふり入すり込上より勝。
(れ) (み) (かつ)



写真22 『寶藏院流紅之書』の書き出しの部分ではあるが、前半はかなり欠損している。

一、四。敵のすやり腰中段の時、十文字上段に取かゝり候を敵よりつき出し候其時、下にて合上にて打落し脇つはへつきとめに勝。^(突)^(留)

一、五。敵のすやり上段の時、十文字飛乱に持する^(ち)

るとかゝり打おとし拜、直鎧よりはつしつき候其時、十文字あしをふみかふり入、上よりすり込勝。^(也)^(外)^(れ)^(み)

三 箇

三

一、三ヶといふ事、鎧数三本有ゆへ三ヶといふ心も有へき事也。古より劔術に五ヶ八ヶといふ事有。^(り)^(あわせ)

ケと三ヶと合てこれハ八ヶの心也。^(五)

一、初。たかに前廣にかまへ候時、直鎧をつき出し候を十文字上にて打落し、其まゝ脇つはへつき留に勝。^(すやり)^(とめ)

一、二。たかに上段の時、十文字ハ少さけて前のよこ手をつきかけかゝり候を、すやりより中段には^(突)^(掛)

つしわきつはへつき出し候其時、十文字下にてあ^(脇)^(又すやりよりへうちこしつき出し)^(十文字)
わせ上にて打落し、其まゝ脇つはへつきとめに勝。

一、三。敵のすやり前廣よりかまへ候時、十文字上段

すこしすしかへ身のかねを合せかゝり候をすやりよりつき出し候其時、十文字にて打落し、すやり引取候所をわきつはへつき留に勝。^(少)^(筋交)^(曲尺)^(きこる)

真之位

一、真之位といふ事、真草行乃三段也。打留迄ハ草の心なり。五ヶ三ヶ合て八ヶハ行の心なり。夫ハ奥ハ真之位といふ心も有へき事也。

一、初。敵太刀を逆身にかまへ候時、十文字下段に、但、鎧のけんさき太刀を持たる敵のこふしにおし^(前九)^(拳)^(押)
あてかゝり候を太刀より切かけ候其時、十文字足^(当)

をふみ込、なお下段に落候へハ太刀を車に直し引取候所を脇つはへつき込勝。^(八女)

一、二。敵太刀をはつさうに構へ候時、十文字下段に持かゝり候を太刀より切かけ候所ヲかふりつきに其まゝ勝。

一、三。敵の太刀とうはうにかまへ候時、十文字上段にけんさきを敵のひたひにおしあてかゝり候所ヲ^(初九)^(額)^(押当)
太刀よりはりかけ候時、脇つはへつきとめ勝。

一、初。敵の長刀を瀧^(流)なかしにかまへ候時、十文字上段に持かゝり候を長刀がはりかけ候其時、十文字足をふみ込、中段にはつし候所ヲ長刀より脇つはへつき候時、上より打落勝^(ち)。

一、二。長刀を前廣よりかまへ候時、十文字下段に持かゝり候を長刀よりあしを引切落候所を十文^(きり)上^(う)手がかふりつきに勝。此長刀のかまへ水車といふを^(教)しへも有。

一、三。長刀芝^(返)かへしにかまへ候時、十文字腰中段にて長刀をおさへる心持にて、上手より先をついて取へし。この長刀のかまへ曲星といふを^(教)しへも有。

一、初。敵すやりを下段にかまへ候時、十文字腰中段に持、けん^(削)つもりをあた^(積)らさる所にて下段におろし候へハ、すやりよりつき出し候所を十文字足をふみ込、うしろにて合入込候時、すやり前へはね^(あわせ)こしつき候所を十文字まへにてつきとめに勝。^(越)^(突)

一、二。すやり腰中段の時、十文字上段に持かゝり候を、すやりよりつき出し候其時、十文字下にて合

候所をすやりうしろへはねこしつき候を十文字かふり入、そのまゝ勝。

一、三。すやり脇取の下段之時、十文字脇取をすこ^(少)したかく時かゝり候を、すやりよりつき出し候所を^(喰)くわつして上より打おとしつき込勝。

裏之鎧

十一

一、うらの鎧といふ事、許之巻ニも無之候といへとも、先々^(い)習来^(り)殊真之位^(じしん)□□□□といへは、うら^(裏)の有ましき事ニ候わす、爰に書^(き)しるし置事也。^(く)

一、初。たかに遠候ハ少中段に持かゝりてすやり下段に直し候時、十文字もはやうにおろし候所をすやりよりつき出し候其時、十文字足を引かふり、又あしをふみ込なから前へ切^(捨)すてそのまゝ勝。

一、二。敵のすやり下段之時、十文字上段に持かゝり候をすやりよりつき出し候其時、十文字にて合^(あわせ)か^(とめ)ふり、そのまゝかふりつきに二のうでをつき留勝。

一、三。敵協取の下段之時、十文字ハ協取の上段に持かゝり候所を、すやりより脇つはへつき出し候其時、十文字足をふミ込上よりよこ手鐙にてかけ落し勝。

一、初。敵のすやり腰中段之時十文字上段に持かゝり候をすやりよりつき出し候所を十文字下にて合、すやりより打ししうしろへつき候其時、十文字足をふミ込、かふり込其まゝ勝。

一、二。たかに前ひろの時、すやりよりつき出し候を十文字上にて打、すやり中段に直しつき候所を十文字下にて合、又すやりへうちこしうしろへつき出し候其時、十文字足をふミ込かふり込其まゝ勝。
一、三。敵前ひろの時十文字上段に持かゝり候を直鐙より打込つき出し候所ヲ十文字あしをふミ込くわつしてかふり其まゝ勝。

一、四。すやり腰中段の時、十文字上段ニ取かゝり候を敵よりわきつはへつき出し候其時、十文字よこ手鐙にて中かけにかけおとし勝。

一、五。敵上段之時、十文字飛乱にかまへ、するくとかゝり、すやりを打落候を直鐙中段にはつし、すくにつき出し候其時、十文字足を引かふり、又足をふミ込、前へきりすてそのまゝ勝。

一、初。たかに前廣の時、すやりよりうしろへ打こしつき出し候を、十文字かふりこミ其まゝ勝。

一、二。たかに上段之時、十文字ハ少さけて前のよこ手かまをつけかけかゝり候を、すやり中段にはつし、すくにわきつはへつき出し候を、十文字あしをふミ込合こミ其まゝ勝。

一、三。敵まへひろの時、十文字上段少すしかへ、身のかねを合かゝり候を、すやりよりつき出し候其時、十文字上よりおとし其まゝ勝。

丸 橋

五

是も書物ニハ無之候へとも、先にををしへ来る事なる故、覚のため爰ニしるし置事也。

一、丸橋といふ事、つき直しもいふなり。前のこと
く段々かまへ来り、仕合に入可申仕込（すべし）（こみ）（慣）のならハし
なるゆへ丸橋といふならへなり。鷹をあわする仕
込も丸橋といへり。

一、初。たかに上段之時、十文字ハ鎧先をさ（下）けて前
ノよこ手鎌にてすやりをとむる心持ニてはりかゝ
り候所を、すやり中（段）たんに直し、脇つほへつき出
し候其時、十文字下にて合、すやりうしろへ打こ
しつき出し候を、十文字かふり込勝。

一、二。敵中たんの時（段）十文字上段に取、はしり（走）よりな
から中段に直し、前（走）のよこ手鎌にてすやりを上（走）
おさへる心持にする。其時すやりはつし打こし上
よりつき出し候所を十文字かふり込勝。

一、三。敵脇取の上段にかまへ候時、十文字脇取の下
たんに持（段）かゝり候所をすやり上よりつきおとし候
其時、十文字かふり込勝。

一、四。敵脇取下段之時、十文字脇取の上段に持（上）かゝ
り候所を、すやり下よりつきあげ候を、十文字上

よりひたひたと打留候而其まゝ勝。

一、五。たかに前廣にかまへ候時、十文字前（上）のよこ
手にてすやりをとむる心持にてはしりより候を、
すやりうしろへうちこし突出し候所を、十文字足
をふみ込上より打落す。すやり前よりつき出し候
へハ十文字前にて合、すやり又うしろへ打こしつ
く其時、十文字かふり込勝。

目付三段之次第

一、上段の鎧ハ（上）劔先を敵のひた（額）いにおしあて、あかり
下りなきやうにすへし。

一、中段の鎧ハ三通り有。肩通りに持を遠山（上）の中段と
いゝ、顎（あご）通りにかまへたるを中段といゝ、腰とを
りに持を腰中たんと（段）いふなり。

一、下段の鎧ハ、敵のひさかしらに劔先をおしあて、
上りさかりなきやうに持を下段といふ也。

一、こくうの目付とハまミの間をいふ。但、まミの間
(鹿空)
 とハかほのけの間の事なり。

一、遠山の目付といふは敵の肩に目を付る事をいふな
 り。

一、折の目付といふハ敵のひちに目を付る事をいふな
(お)
 り。

一、ほしの目付といふは、敵の取分右のこふしに目を
(星)
 付る事をいふなり。

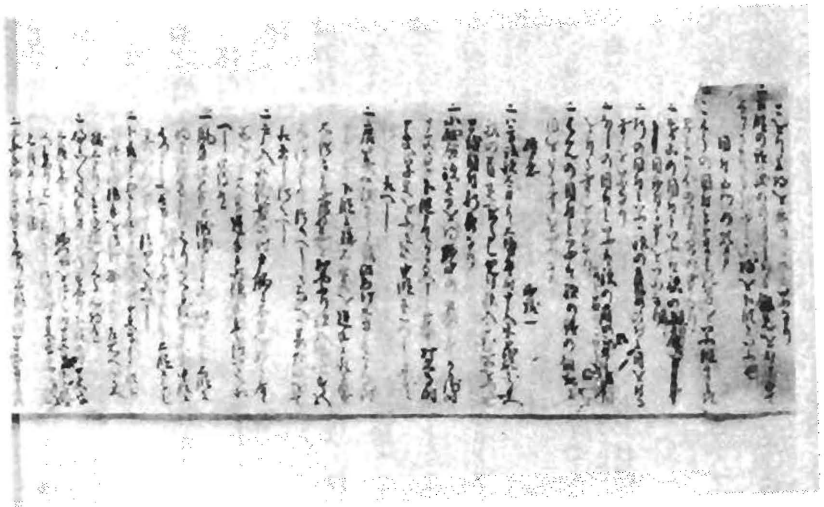
一、はくんの目付といふは、敵の鎧の劔先に目を付る
(破軍)
 事をいふなり。

極意
写真部

式拾一

一、八方詰。敵太刀にて大勢懸候時、十文字飛乱にか
(か、り)
 まへ、敵の首・足へちらしかゝり、敵入こむ所を
 ついてとる目付肝要なり。

一、小袖分。敵太刀を持、野中の幕にてかゝる時、十
 文字下段にてかゝるへし。幕かくる時十文字足を



写真② 「極意」の部分。

ふミ込、中段にはつし其まゝついて取へし。

一、唐笠合。^(かからなかあわせ)敵からかさをひろけ、太刀にてかゝり候時、十文字下段に構、石突を逆手に取とひ違石つきにて唐笠を打やふり、敵入込^(こみ)候ハすくに石つきにてつくへし。さなくハ其たいを^(体)ミテ取直しつくへし。

一、戸入。^(しりぞこ)取籠者の時、戸脇に太刀をぬき居候所を十文字逆手に取、横手にてついて取へし。口傳有。

一、風車。^(ふうぐるま)敵長刀を瀧流にかまへ候時、十文字上段に持かゝる。長刀よりはりかくるを十文字中段にはつし、又長刀より下段にてはる時十文字上段にはつし、其いろを^(色)ミテついて取へし。

一、下道具合。すやり上段の時十文字も上段少下鎧に持、横手をつけ掛かゝり左右へおさへ勝。上よりよこ手鎌をかくる心持有。

一、ふた／＼目遣。^(ふた／＼めづかい)身のかねすやり下段の時十文字上段、すやりより脇つほをつく時十文字下にて合、又すやり上へうちこしつく時、十文字かふり入、

^(柄詰)あつめにて勝。

一、妻手切三寸替。^(かわり)すやり上段の時十文字も上段に持かゝり中段に直し打落勝。又打落候時、すやりよりはつす所をとひ違打落勝。^(飛)

一、浦之波。すやり脇取下段之時、十文字遠山の中段ニ持かゝり、すやりつき候所を十文字上より打落勝。

一、龍の打込。すやり遠山の中段の時十文字上段に持かゝり、わりひさにて中段に直し打落勝へし。^(割 膝)

一、龍おとし。すやり下段之時、十文字頭よりたかく中段に持かゝり、敵よりつき出し候所を上より打落し、はやくついて取へし。^(しりぞ)

一、茂。竹やふ、柴かきなど通る時、十文字の太刀打を右の手にて身にそへ持、左手にておしわけとたるへし。^(茂 添 押 合 通)

一、逆手鎌。すやり中段の時、十文字上段逆手に持かゝり候所を、すやりよりつき出し候時、十文字下にて合。^(あわす)但、敵よりつよくおしこミ候時、さか手^(逆)

に持たるか^(強)つよミなり。

一、五月雨。すやり下段の時、十文字脇取上段に持かゝり候を、すやりよりつき出し候を、上^ウ打おとし、又、前へ廻しつく所を前にて打落勝。長柄のすやりに合たる時よし。五月雨の口傳有。

一、早馬^(はやうま)。すやり下段にも中段にもかまへ候時、十文字上段に持かゝり、すやりよりつき出し候を十文字上より横手^(横)かまにておさへ、すやり引取所へ乗込勝。すやりへ目付にハ敵のこふし^(拳)を目付る事肝要なり。

一、紅^(く)。敵何やうにすやりをかまへ候共、其鎧のいろ^(色)に付合勝候をくれないといふなり。

一、思返^(おもいかへ)。すやり下段の時、十文字も下段にもちかゝり候を、すやりよりつき出し候其時、十文字足を引かふり、鎧口のあかさるやうに頭の上よりすり込勝。

一、前廣。たかに前ひろにかまへ候時、敵より先をこしつき出し候を上より打落、すやり下よりつき

候所を十文字下にて合、其まゝ勝。又、十文字より先にて勝心持も有。

一、芝搦。すやり上段之時、十文字くわつ^(張)して下段にかふり候時、すやり^ウつき出し候を上にて打落、はやく立てつくへし。上り坂下り坂によらず一騎うちの時遣う鎧なり。

一、舟軍^(ふねぐみ)。ふないくさの時ハ、打違ル時横手にて敵のふな^(舟)はたへ打かけ引よせついて取へし。すく^(直)につく事ゆめく有へからず。

一、狭間之鎧^(はざまのよろい)。石つきにてつき出すへし。但、いの目^(猪)に口傳有。

口上極意

十八

一、水車^(みずぐるま)。敵長刀瀧^(流)なかしにかまへ候時、十文字上段に持かゝる遣方^(つかいかた)かさ車と同然、打にミへて水の元^(とむ心)とむ心にて勝、心持口傳有。

一、鱗形^(うろこかた)。すやり中段之時、十文字上段に持かゝり候をすやりより突出し候所を、十文字合候^(あわせ)てあつめ

の時三角うろこかたにて勝。(鎧形)心持口傳有。

一、切鎌。敵太刀を持候時、十文字上段に持、鎌を上へたて、(留)底手をかため腰につける心持にて敵のミ(間)けんよりこふしへかけて切かけ勝へし。口傳有。

一、體曲。敵すやりの時、十文字を片手に持て身を遣。(つかう)口傳有。

一、柄返。敵直鎧にても太刀、長刀にても、十文字の鎌つまりたる時、(柄返)あかへしにて敵のミけんを打碎候様に遣。口傳有。

一、悦眼。敵のすやり中段之時、十文字上段に持かゝり、(喰)くわつして中段直し候所をすやりより打こしつき候其時、十文字打留勝。口傳有。

一、西風。敵すやりいか様にかまへ候共、十文字飛乱にもちかゝり、すやりよりつき出し候所を左右へまくり付勝。心持口傳有。

一、柳雪。敵前廣にかまへ候時、十文字上段に持かゝる所すやり、(つ)よく打込突出し候其時、十文字身の先なる程足を引かふり、すくに上(ふ)すり込勝。

口傳有。

一、稻妻。合上段に持かゝり、(あいじょうだん)十文字中段に直し打所をすやりはつし候其時、十文字前へ足をふみ出しなからついて取。口傳有。

一、水月。敵すやり前廣の時、十文字上段少すしかへ持かゝり候をすやりよりつき出し候其時、十文字打留其まゝ勝。水にうつりたる月の心持。口傳有。

一、柄越。自然うしろつまり、石つきつかされぬ時、(しねん)十文字をくり込、石つきをそらへなして下段の心持にて逆手鎌を用ひ敵すやりつき出す所を、前後(さかてがま)にて合留て勝。(あわせとめ)口傳有。

一、栄月。すやり協取の上段之時、協取の下段にかまへかゝり、すやりよりつき出し候所を十文字かり込勝。上(つ)月(づ)の落かゝる下にて請留る心持。口傳有。

一、十二本搦。西風のこつく遣鎧なり。但、敵大勢すやりにてかゝり候時、十文字にてすやり一本まくり付(つけ)れへ、大勢のすやりをまくる心持。口傳有。

一、馬上。馬上之時鎧持やうの事。太刀打契ひもとを右の手へて身にそへ持、左手片手綱にて馬を乗。

口傳有。

一、必勝。敵すやりいかやうにかまへ候共、十文字飛乱にかまへかゝり、すやりつき出候所を打落、其まゝ勝。口傳有。

一、乱勝。十文字上段にかまへ、ともかくも敵の変に應し勝。口傳有。

一、單穴。^(細間)坂にてもほそひやいにても下り坂にても、

上ニてつまり腰もつまりたる所にてそけつにかまへ、向ひさを立、右のひさをつきて十文字に小上段にかまへて遺鎌なり。そけつとハ小上段の事也。

口傳有。

一、一之鎌。一字のかまとも、一々のかまともいふ。

口傳有。

外物

写真

十一ヶ條

一、沼濱^(ぬまぎわ)にてつきむすふ次第の事。はいたてを弓手^(ゆんで)のひさに敷、鎧を上段ニ持合するもの也。口傳有。

一、坂にて上下の鎧合する次第の事。上り坂乃時は、ひたりのひさをつき、右のひさをたてゝ鎧を中段にかまへ合するものなり。又、下り坂の時は左のひさをたてゝ右のひさをつきて鎧を合へし。口傳有。

一、手裏けん^(てうりけん)とめ乃事。十文字を飛乱にかまへかゝり候時、太刀よりしゅりけん^(しゅりけん)にうち付候所を、十文字くわつしてこふし^(こふし)をうちとむる心持肝要なり。

口傳有。

一、ふんの内つきやう心持とハ、堅物^(かたきもの)なとためし候時、鉄板合こ^(てつばんがひ)うへなとをつく時、十文字にてもすやり

にても逆手^(さかて)に持つもの也。口傳有。

一、遠近といふ事。鎧の打所之事也。敵の鎧劔先より二尺五寸^(二尺五寸)として打もの也。口傳有。

一、三尺のつもり^(三尺のつもり)。たかいにあいつきの時、上鎧につくへし。上鎧ハかならず三尺の延^(のび)あるものなり。

口傳有。

一、五尺のつもり。敵直鎧をつき出し候時、十文字足

あとへ引、すやり引取候所を十文字上より一あし

ふミ込つくへし。かならず五尺の延あり。口傳有。

一、たて合之事。十文字横手鎌にて上より掛落、はや

くついて取へし。口傳有。

一、十文字合の事。たかいに先にたち上下にておさへ

る心持肝要也。但、たかいに上段の時、敵下鎧に

てよこ手を付過候ハ、上鎧より引落勝心持もあ

り。口傳有。

一、生捕のかまの事。石つきのいの目へ横手を入るゝ

心持。いなく。口傳有。

一、やきり鉄炮留の事。取籠者有候時、十文字鎧の柄

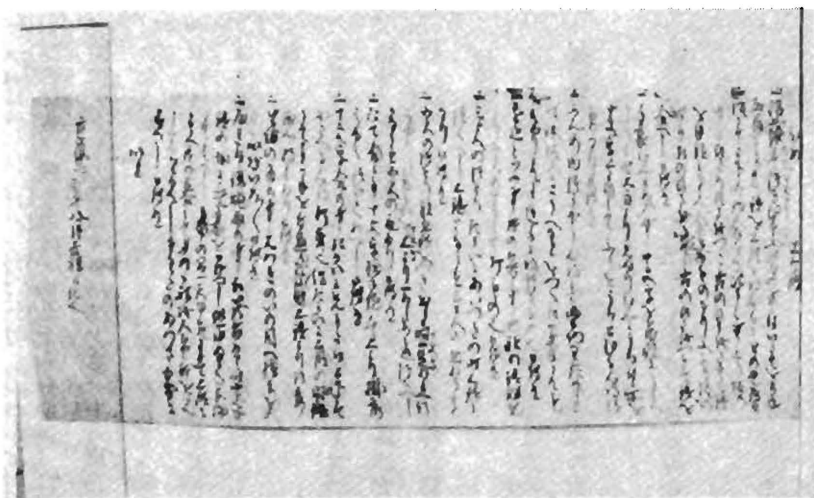
に三所幕をつけへし。但、中のまくハ真綿にてす

へし。幕の間一尺斗宛にて上段にかまへ、右の幕

にて身のかねを合せ鉢をかくしてかゝるへし。ま

わたのあつき五分にすへし。口傳有。

以上



写真②④ 「外物十一ヶ條」より最後までの部分。年記はあるが宛名はなく、「伝書」というより「記録」というべき資料である。

(一七二七)
享保二丁酉 年八月吉祥日 記入

解説

1、先の部分、すなわち「飛乱太刀合」三本、「虎乱長刀合」三本、「打留鑑合」三本及び「五箇」のうち始めの二本の術技の説明の部分が破損のためそれぞれ欠けている。

桜庭又右衛門成美が元禄十四年(一七〇一)浅利伊兵衛均禄に与えた同名の資料5『寶藏院流紅之書』のどの項目より詳細な術技解説書となっている。著者名はないが浅利伊兵衛によるものと思われる。

2、「寶藏院紅之書」の原典は特定できないが、「寶藏院流高田派の祖高田又兵衛吉次の高弟久世大和守広之が、同流の『十文字鎌目録』の術技を、師伝のとおり書き付けたという貴重な覚書」『鑑秘書』(『日本武道大系』第七巻、三頁)がそれではないかと思われる。『鑑秘書』の年記に「寛永十三_{丙子}(一六三六)極月」とある。

3、『日本武道全集第六巻』に「寶藏院流紅之書」という同名の卷子本が掲載されている。寶藏院流中村派の伝書と思われるが、この年記に「宝永三_{丙午}年(一七〇六)」とあり、本資料5「寶藏院流紅之書」の「元禄四_{辛巳}曆(一七〇一)」より新しいが、説明の内容は簡易で項目も少ない。

10、寶藏院流許卷

卷子本

187

寶藏院流名目録

一、飛乱

太刀合 三

一、虎乱	長刀合三
一、打留	鍵合三
一、五箇	口傳五
一、三箇	口傳三
一、真位	口傳
極意	
一、八方詰	
一、小袖合	
一、唐笠合	
一、戸入	
一、風車	
一、下道具合	
一、俤之曲尺	
一、妻手切三寸替	
一、浦之波	
一、龍之打込	
一、滝落	

一、茂
一、逆手鎌
一、五月雨
一、早馬
一、紅
一、思返
一、前廣
一、芝搦
一、船軍
一、狭間之鎌

寶藏院流歌書

夫兵法者不動明王愛染按前有妙何
間去鼓樵哉待具足不有利一心闇而
無得利死定勿逢退師親之傳何
疑之有哉

なるこをハおのか羽風にひきたてゝ
こゝろとさへくむらすゝめかな

染め出す日とはなけれど はるくれは

柳ハみとり花はくれなる

しら露ハをのかすかたをそのまゝに

もみちにおけハくれなるの玉

聖人法秘

非秘為傳

一目羅不能得鳥 羅者是一目

獅子忿嗔之旨 前三後一

右此一巻雖為秘術御執心之間令相

傳早聊他見有間敷者也

寶藏院流許卷

写真²⁵⁾

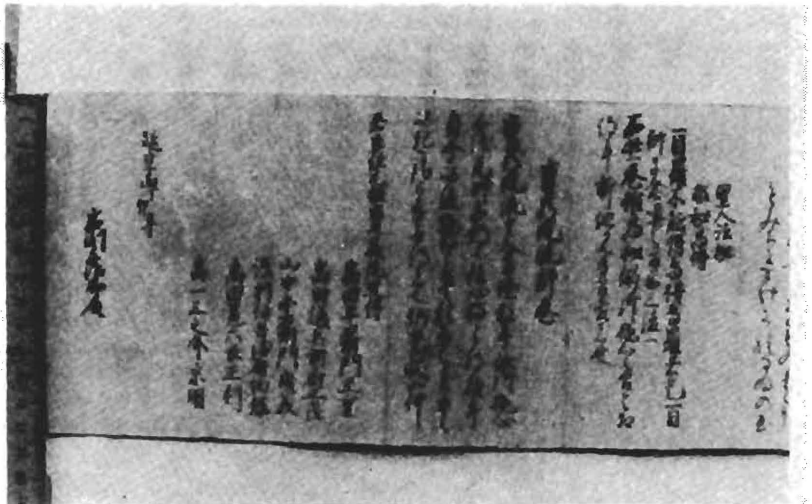
寶藏院流十文字鎌數年依御執心

不淺先師相傳之位心持令傳授早

自今以後執心之輩於有之者重々

以起請可有相傳者也仍免狀如件

奈良住元祖寶藏院直傳



写真²⁵⁾ 奥書きの部分。朱印・花押はないが伝承者を記載している。

11、「寶藏院流許卷」

卷子本

延享四卯年
(一七四七)

岩渕千治郎殿

高田平右衛門正重

高田儀兵衛尉正茂

山中亦右衛門成美

浅利伊兵衛尉均祿

高田甚六郎 正利

高一三之介 宗明

〇 (印判)
寶藏院流名目録

一、飛 乱 太刀合 三

一、虎 乱 長刀合 三

一、打 留 鐙合 三

一、五 箇 口 傳

一、三 箇 口 傳

一、真 位

口 傳

極意 (印判) 写真 四 葉

一、八 方 詰

一、小 袖 合

一、唐 笠 合

一、戸 入

一、風 車

一、下 道 具 合

一、梯 之 曲 尺

一、妻 手 切 三 寸 替

一、浦 之 波

一、龍 之 打 込

一、滝 落

一、茂

一、逆 手 鎌

一、五 月 雨

一、早馬

一、紅

一、思返

一、前廣

一、芝搦

一、船軍

一、狭間之鎌

寶藏院流歌書

夫兵法者不動明王愛

染按前有妙何間去鼓

枹哉待具足下有利一

心闔而無得利死定勿

逢退師親之傳疑之

有哉

なるこをはをのか羽風に

ひきあてゝこゝろと

さわくむらすゝめ哉

染出す日とはなけれど

春くれは柳ハ

みとり花はくれ

なひ

白露ハをのかすかたを

そのまゝに

紅葉にをけはくれ

なひの玉

聖人法秘

非秘為傳

一目羅不能得鳥得

鳥羅者是一目獅子忿

嗔之旨前三後一

右此一巻者 雖為秘術
御執心之間 令相傳
早聊他見有間敷
者也

寶藏院流許卷

寶藏院流十文字鎌数
年依御執心不浅先師
相傳之位心持令傳授
早自今以後執心之輩
於有之者重々以起請
可有相傳者也仍許狀
如件

奈良住元祖寶藏院直傳

写真27

高田平右衛門正重

高田儀兵衛尉正茂

浅利伊兵衛尉均禄

佐野吉郎兵衛尉

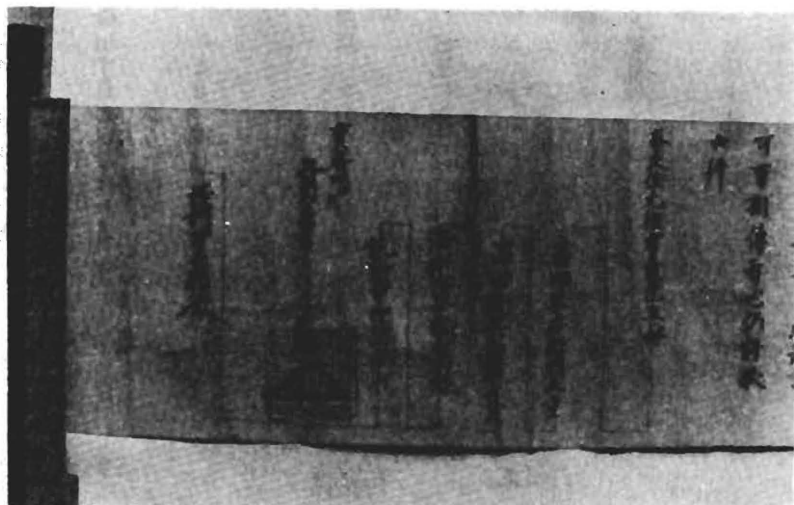


写真27 奥書きの伝承貴の部分。この浅利万之助は「均費」である。

(一七五四)
寶曆四 甲 戌

九月吉日

写真 陽春
正辰 (朱印・花押)

浅利万之助殿

あとがき

「林崎新夢想流(居合)」の伝書に関して、今回は「天真正」という語の語源と意味について解説を試みたが、実は未だに理解できない点が多い。

戸部新十郎が「兵法秘伝考」の「居合」(『武道』一九九八年十一月号 一一頁)に次のように述べている。

「近代の名人とたたえられる無双神伝流の中山博道は、林崎神社に行ったとき、先人の奉納抜刀者の記録が凄いの
で驚いたという。△同社の記録に、九万本を筆頭に三、四万本位はざらにあって、その奉納者の人名は、今日まった
く名も知られずにある方々であった。もちろん、何日もかかって参籠してのことではあったろうが、その忍耐と体調
には、敬服のほかない。▽(口述)こう述懐しているが、じつは博道自身一万三千本も抜いて奉納している。大正十
年頃、博道五十歳に近かったが、傍におかゆを置き、腹が減ればそれをすすり、十本抜いたら石を一個置く、という
ふうに、一昼夜、不眠で到達したという。その精進は並尋常でない。」

右のような参籠修行を続けることによって「天真正」の真の意味も理解できるのかも知れない。

「寶藏院十字鐘」の伝書では、慶安四年(一六五一)高田平右衛門正重が唐牛兵九郎に授与した資料1「寶藏院十

文字鑑許卷二」と、宝永元年（一七〇四）桜庭又右衛門成美が浅利伊兵衛均禄に授与した資料6「寶藏院十文字鑑印可状」の解説と内容の解説に重点をおいたが、力量不足のために不十分な点があるに違いない。御叱正をいただければ幸いである。

なお、資料5・9「寶藏院流紅之書」に「注」を施したかったが、本紀要の規定の分量をあまりにも超過するので割愛することにした。

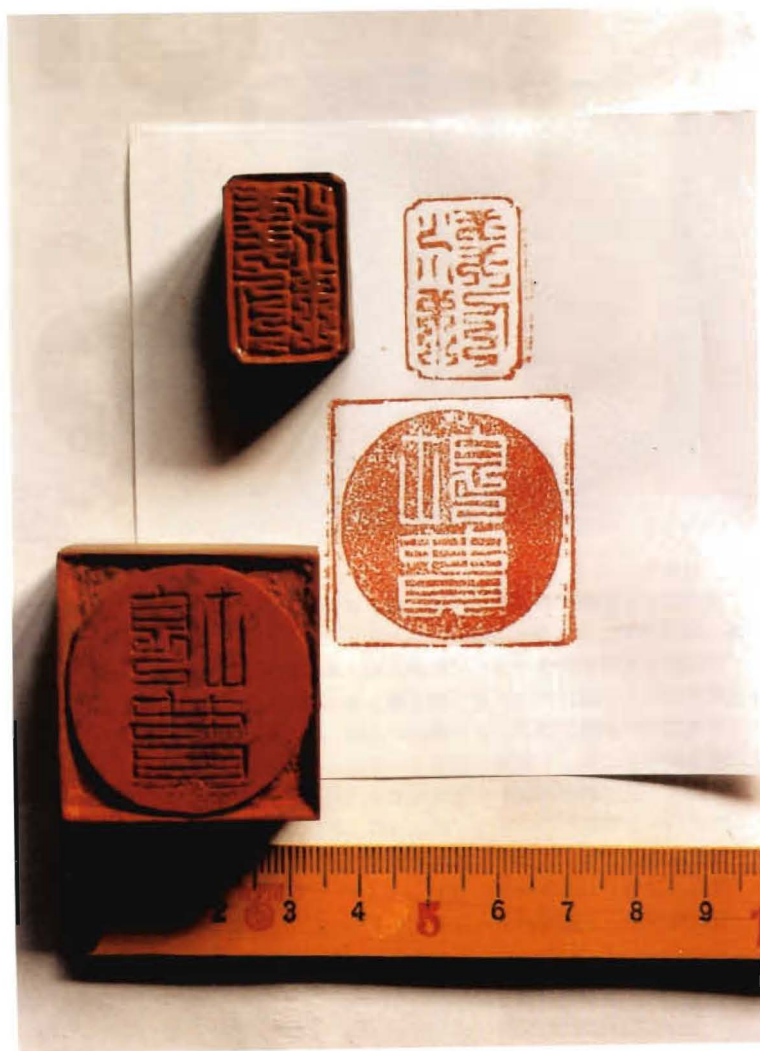
浅利伊兵衛均禄の「寶藏院十字鑑」の修行は、高田儀兵衛正茂について延宝四年（一六七六）から天和二年（一六八二）までの約七年間、高田儀兵衛亡き後は桜庭又右衛門成美について元禄十四年（一七〇一）から宝永元年（一七〇四）までの約四年間師事している。延宝四年から通算すると実に二八年目で「印可状」を受けたことになる。まさに拔群の努力家と云わねばならないだろう。この努力精進こそ、浅利伊兵衛が津軽弘前藩きっての武芸者とたたえられる所以であり、器用や才能ばかりでなかったことを物語っている。



写真(1) 「袖」にある印判、上は「浅利」、下は「均禄」の印文である。



写真(2) 「袖」にある印判、上は「浅利」、下は「均費」の印文である。



写真(3) 「浅利」(上)と「均費」(下)の印章。



写真(4) 右より

- 「寶蔵院十文字鍵許卷二」(「歌之書」に当る。見返し、奥巻もなく本紙のみ。慶安四年二月九日ー1651)
- 「寶蔵院十文字鍵許卷一」(「流名目録」延宝四年九月十五日ー1676)
- 「寶蔵院十文字鍵許卷二」(「歌之書」延宝五年七月吉日ー1677)
- 「寶蔵院十文字鍵許卷三」(「免状」天和二年八月十五日ー1682)
- 「寶蔵院流紅之書」(元禄十四年十一月吉日ー1701)
- 「寶蔵院十文字鍵印可状」(宝永元年十二月十三日ー1704)
- 「寶蔵院十文字鍵許卷一」(「流名目録」年記なし)
- 「寶蔵院流紅之書」(享保二年八月吉日ー1717)
- 「寶蔵院許卷」(延享四年ー1747)
- 「寶蔵院許卷」(宝暦四年九月吉日ー1754)



写真02 高田儀兵衛正茂の朱印・花押

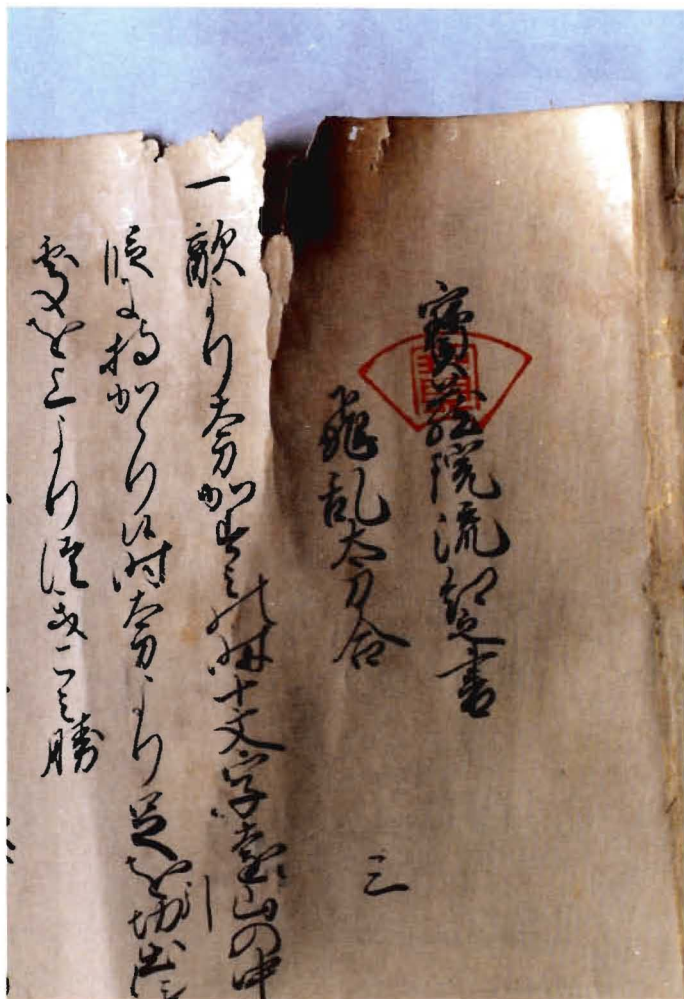


写真44 寶蔵院流の「寶」と「蔵」の間に印文「寶」の印判がある。

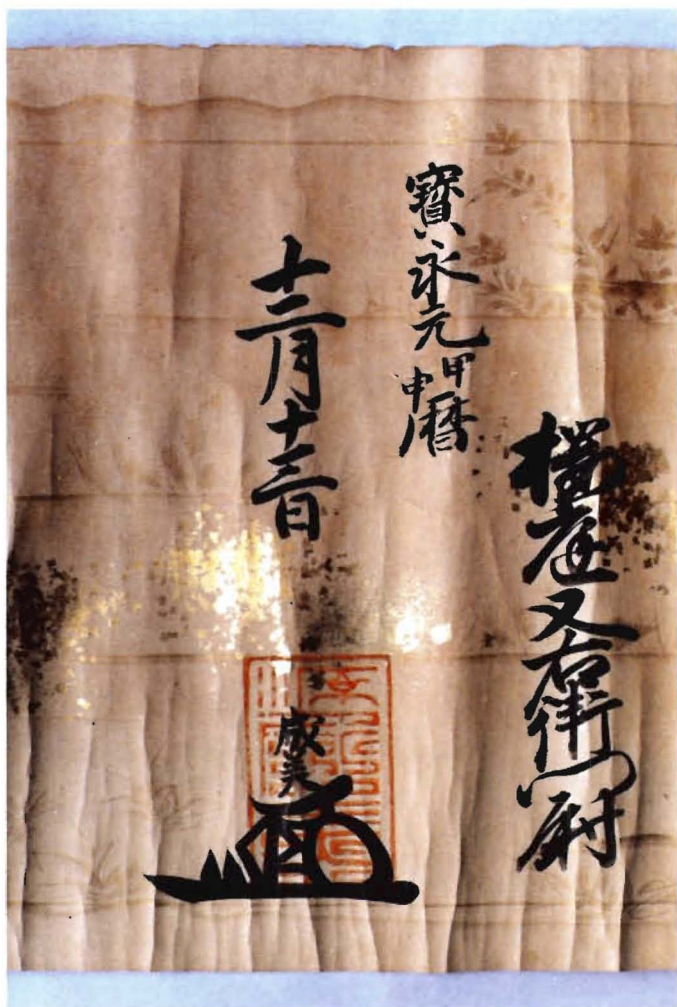


写真09 櫻庭又右衛門成美の朱印・花押。
この「印可状」の用紙には金粉を使用した模様が描かれている。



写真20 「極意」の上に「印判」がある。(印文不詳)



写真② 佐野吉郎兵衛正辰の朱印・花押。